1977

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十四年五月一日發行（毎月一回一日發行）

# 京城雜筆

秦湶臺 瓦窗漢

永樂町人 編輯

五月號

【第七十五號】

姉妹自轉車

# プリミヤ

# アイリス

實用堅牢として各階級に愛用せられつゝあるプリミヤ自轉車の需要益々旺ん也

耐久輕快愈々その聲價を高めつゝあるアイリス自轉車の用途は年と共に激增す

株式會社 丸石商會

東京 大阪 横濱 福岡 京城

# 本號目次

（大體原稿到著順に依る）


河內山 樂三（朝鮮火災海上社長）……青葉橋……（一）
伊藤 憲郎（京城覆審法院判事）……春日漫記……（三）
丸山 幹治（京城日報主筆）……女のいろ〳〵……（四）
瀨戸 潔（瀨戸病院長）……破顏一笑……（五）
松井 權平（總督府醫院外科部長）……日本民族……（六）
中村 健太郎（朝鮮佛教社主幹）……三壽翁……（八）
萩原 彦三（總督府水產課長）……魚の夫婦……（一〇）
澤村 九平（不二興業支配人）……鬼……（一一）
衣笠 茂（京城中央婦人病院長）……日本刀……（一二）
內田 竹三郎（旭町銀月主人）……馬車に乘つた頃……（一三）
見目 德太（京城電氣主任技師）……電氣漫言……（一四）
橘川 克彥（京城郵便局長）……杏所の書……（一五）
山縣 健三郎……紳士たるの道……（一六）
松田 學鷗（總督府囑託）……北鮮今昔……（一七）
田口 耕平（山口銀行京城支店長）……慶州紀行……（一八）
駒田 亥久雄（總督府技師）……朝鮮の溫泉……（二〇）
野崎 眞三（朝鮮新聞社會部長）……私の迷信……（二一）
櫻井 小一（殖產銀行理事）……書……（二二）
馬野 精一（京畿道警察部長）……洋行縮尺話……（二三）
佐藤 作郎（鐵道局旅客係主任）……汽車の公德……（二四）
加藤 松林（鮮展日本畫家）……平福百穗氏……（二五）
廣江 澤次郎（在奉天實業家）……東支鐵道南線……（二六）
上田 勇（京城中央電話局長）……親に孝行……（二七）
細井 肇（東京自由討究社長）……大庭柯公を想ふ……（二八）
志村 春方（東拓庶務課長）……短歌……（二九）
今村 韌……帶の情趣……（三〇）
古城 梅溪（實業家）……詩學古事抄錄……（三一）
市村 毅（水原高農講師）……馬來半島の風物……（三二）
中島 司（殖產銀行調査役）……自樂草舍より……（三四）
上杉 直三郎（京城府圖書館長）……圖書館から……（三五）
阪上 滿壽雄（鐵道局營業課）……女は弱いか……（三六）
山根 貞一（京城郵便局監督課長）……奉加帳……（三八）
溝呂木 光治（東京、將棋七段）……對局雜感……（三九）
德野 眞士（朝鮮鑛業會主事）……生活改善……（四〇）
利根川清治郎（利根川齒科醫院長）……自然の叛逆者……（四一）
守屋 德夫（殖銀人事課長）……京城つれつれ草……（四二）
眞木 猛（京城府人事相談所）……ことば……（四三）
伊藤 龍（朝鮮ホテル）……旭町の夜……（四四）

# プリミヤ

# アイリス

姉妹自轉車

IRIS CYCLE TRADE MARK

實用堅牢として各階級に愛用せられつゝあるプリミヤ自轉車の需要益々旺ん也

耐久輕快愈々その聲價を高めつゝあるアイリス自轉車の用途は年と共に激增す

株式會社 丸石商會

東京 大阪 横濱 福岡 京城

# 本號目次

（大體原稿到著順に依る）


河內山 樂三（朝鮮火災海上社長）……（一）
伊藤 憲郎（京城覆審法院判事）……春日漫記……（三）
丸山 幹治（京城日報主筆）……女のいろ〳〵……（四）
瀨戸 潔（瀨戸病院長）……破顏一笑……（五）
松井 權平（總督府醫院外科部長）……日本民族……（六）
中村 健太郎（朝鮮佛教社主幹）……三壽翁……（八）
萩原 彦三（總督府水產課長）……魚の夫婦……（一〇）
澤村 九平（不二興業支配人）……鬼……（一一）
衣笠 茂（京城中央婦人病院長）……日本刀……（一二）
內田 竹三郎（旭町銀月主人）……馬車に乘つた頃……（一三）
見目 德太（京城電氣主任技師）……電氣漫言……（一四）
橋川 克彥（京城郵便局長）……杏所の書……（一五）
山縣 悌三郎……紳士たるの道……（一六）
松田 學鬪（總督府囑託）……北鮮今昔……（一七）
田口 耕平（山口銀行京城支店長）……慶州紀行……（一八）
駒田 亥久雄（總督府技師）……朝鮮の溫泉……（二〇）
野崎 眞三（朝鮮新聞社會部長）……私の迷信……（二一）
櫻井 小一（殖產銀行理事）……書……（二二）
馬野 精一（京畿道警察部長）……洋行縮尻話……（二三）
佐藤 作郎（鐵道局旅客係主任）……汽車の公德……（二四）
加藤 松林（鮮展日本畫家）……平福百穗氏……（二五）
廣江 澤次郎（在奉天實業家）……東支鐵道南線……（二六）
上田 勇（京城中央電話局長）……親に孝行……（二七）
細井 肇（東京自由討究社長）……大庭柯公を想ふ……（二八）
志村 春方（東拓庶務課長）……短歌……（二九）
今村 韌……帶の情趣……（三〇）
古城 梅溪（實業家）……詩學古事抄錄……（三一）
市村 毅（水原高農講師）……馬來半島の風物……（三二）
中島 司（殖產銀行調査役）……自樂草舍より……（三四）
上杉 直三郎（京城府圖書館長）……圖書館から……（三五）
阪上 滿壽雄（鐵道局營業課）……女は弱いか……（三六）
山根 貞一（京城郵便局監督課長）……奉加帳……（三八）
溝呂木 光治（東京、將棋七段）……對局雜感……（三九）
德野 眞士（朝鮮鑛業會主事）……生活改善……（四〇）
利根川清治郎（利根川齒科醫院長）……自然の叛逆者……（四一）
守屋 德夫（殖銀人事課長）……京城つれつれ草……（四二）
眞木 猛（京城府人事相談所）……ことば……（四三）
伊藤 龍（朝鮮ホテル）……旭町の夜……（四四）

# 京城雜筆

## 青葉橋

朝鮮火災海上　河内山樂三

舊龍山から京城への途中に、旭川と云ふ小川が流れて居る、これに架けられた橋には『第三青葉橋』と、筆太に書き付けてある、筆者は何日もこれを『あをばばし』と讀んで、別に疑も持たなかつたが、或る時フト平假名で『だいさんせいはばし』としてあるのを見出した、そこで道を間違へたかといぶかりつゝ、よく見廻はすと、同じ橋の兩端の親柱に漢字と假名とで、書き分けられてあるのであつた、『青葉』を『せいは』とは隨分無理な讀ませ方のやうに感じたので、質して見ると、此の地方は韓國時代に青坡と稱して居つたが、十數年前青葉町と改めたとのことである、その當時此の地方に住んで居た內地人は、『青坡』を『せいは』と讀んで居たので、勿論內地音で朝鮮音とは何の關係もないが、この『坡』を『葉』にあてはめて『青葉町』とし『あをばちよう』と名付けたものらしい、持つて廻つた話であるが、別段無理はない、ところが橋名に至つて再び『せいは』に歸つたから、意味をなさなくなつた。

全體なぜこんな當字までして、慣れ來つた地名を變更する必要があつたのであらう、或は『坡』と云ふ文字は內地ではあまり使用せぬと云ふやうな譯ではあるまいかそれならば『坡』を『波』に變へて、やはり『せいは』として置いたら、どんな不都合を生じたのであらうか、さうすると、『青海波』を『せいがいなみ』と讀む處があるから、『せいなみ』と間違へるかも分らぬと云ふ、物知が飛び出すかも知れぬ、かうなると際限はないが、筆者は勿論物知でも、學者でもない、普通の內地人として、此の橋名の呼び方を、假名を見て初めて承知した、して見るといくら國語が普及しても、此の橋を往來する大多數の朝鮮人には珍紛漢……譯は分るまい。

元を質せば、日本字の音と訓と云ふものが厄介である、其の上之を混用するので、ます〳〵扱ひ難くなる、早い話が玆に、『平治』と云ふ人がある、これは普通に『へいぢ』と讀み、『ヘイハル』とも『ヒラヂ』とも『ヒラハル』とも讀む者は滅多にあるまいが、『正治』となると、『さう簡單には參らぬ、『しやうぢ』か『せいぢ』か『まさぢ』か『まさはる』か御本人に聞かねば實際と符合しかねる、全體其の主體の表示であるべき名前を、一々本人に質さねば眞の呼名が分らぬと云ふのでは、其の目的や効能の半ばは失はれてしまう、それで時には氣のきいた人は名前に振假名を付けて居るが之も少し間がぬけては居まいか、事務簡捷の世の中だ、一層のこと假名だけにしても惡くはあるまい

何れにしても母親の乳と共に國語を飲み込んだ內地人には、音と訓との區別や、文字に依つて讀癖も分つて居るので、この不便も緩和されるが、言葉を異にするものには誠に難解であらう、トニカク物の名前は使ふのが目的であるから、餘り凝らずに通俗的に分り易く願いたいものである、例に採つた青葉橋には敬意を表する。

## ◈名士横丁記

吉田莊一

今村螺炎氏を訪問すべく、大和町二丁目の交番前を、横丁に這入ると、駒田亥久雄さんの家がある、末松熊彦さんの官舍がある、勸業信託の平井さん、藤尾さんの家がある、少し進むと、總督府の平井三男氏の家もある▲それらが殆んど、戶別といつたやうに並んで居る▲私はこゝは名士横丁だと思ひ同時に『雜筆横丁』だと思つて、非常に愉快に感じた▲親類に行つたやうだ。

# 京城雜筆

## 春日漫記

京城覆審法院　伊藤憲郎

×

一枝も芽生えず、一花も綻びず而かも既にそこはかとなく清新の氣配が漂ふ、朝鮮にも春が來たのである。地味な仕事をしてゐる判事さんも流石に嬉しい。

×

清涼里へ一週に一度講義に行く多の間は可成煩はしかつた、寒い朝などは殊に東大門からの電車の中が厭で仕方なかつた、然し一陽來復の春を想ふと心はいつも柔いだ時はとう〳〵來た、私は樂しい氣持で新學期の開かれるを待つてゐる。

×

『二學期は簡單過ぎて丁を頂戴す、法學通論で落第するやも知れず、先生以て諒せられよ』

×

『第二問は自信なければ、遺憾ながら答案が出來ません、不悪』

×

二つとも三學期の試驗答案に發見された附記である、私の緊張した採點氣分は微笑を交へて此の諧謔を迎へた、以て君の答案は出來て居た、不悪氏の答案も第一問は可成良く書けて居た、二人とも夫れ〳〵今度進級したやうである。

延び〳〵と育つ人達と相語るのは愉快だ、今度の學期にはどんな風にやらうかと春の日長を教案に腐心してゐる、中々旨く纏らない。

がチッとも厭やな氣がしない。

×

夢に夢にテイチヤーとなり
獨り立ち
皆共に泣けと教へけるかな

×

昔、或る友達から貰つた歌である、今、私は教へることのかりそめでないことを泌々思ふものである、笑へ、泣け、喜べ、私はなんと教へてゐるであらう、私は受持の法律や經濟を教へるごとに兎に角人生と云ふ二字から離脱したくないと心掛けてゐるのである、余計な事と笑ふ人があるかも知れぬ

×

學問は尻から拔ける螢かな

×

曾つて私は物權法講義の冒頭にこの句を書いて可成自分の氣持を解つて貰つたことがある、法律が今日稍もすると一般の人から異端視されるのは法律の罪よりも法律を教へた人の罪の方が余程深いと考へる、學問殊に法律はそんなに人の心に入り難く又理屈ッぽいものではない、あらぼそれは拔け易い誤學問である、優しい人の心を愛護するもの、これがほんとの法律である。

×

世間では判事や檢事にヒョッとすると可愛い娘を奥れたくない心理を持つてゐるそうである、これでは益々司法官志望が減るわけである、我々の同僚には隨分理性と感情に富んだ男が尠くない、一旦貰つたら最後浮氣など死ぬ迄毛頭するものでないのだが、私の事ではない。判事さんなどは職務柄人間の心理殊にやるせない戀の心持などを女の被告から手離しで御馳走になることもあつて仲々人情は詳しいのだが困つた世間の心理ではある。

×

筆の先を代へる、前月號の記事を見て同僚のT君から『朝鮮問題の歸趣』を借りて來て、今日の祭日を半分費やして讀了したが其半日は實に嬉しいものであつた、私の机は南樣の側にある、机から佛蘭西領事館の建物のある丘を眺めて時々息を入れたが心は感激を杜絶えず一氣に讀んだ。

×

著者の如き『正義の旗手』『人道の鬪士』があることを朝鮮のために限りなく喜ぶと共に、私は未知の著者に對し深甚なる敬意を献げるものである。

×

春の日は全く暮れた、今、夕の鐘が聞える、彼處の丘には灯が點いてゐる。私は机を離れて晩餐に就かねばならぬ。(十四、四、三)

## ◈摘草の著者

吉田莊一

西村前殖産局長は、見かけに依らぬ風流者で、ぞん外多くの歌を詠んで居る▲その日記を見ると、行政整理で、六十七人斬る處を、實員二十四五名にとどめ『夜嵐に散りなむ花をかこひおきて心殘りも今はなしはや』……など。

洋行して何を驚いたかといへば、は少いのでせう。日本人の皿洗ひ、ちやつて置くか。

# 京城雜筆

# 女のいろ〳〵

京城日報主筆　丸山幹治

◇

何しろ十五年振りですから、京城も、そりや變りましたね。しかし一番變つたのは朝鮮の女です。いゝ血色をした女學生が元氣よく往來を濶歩してゐるのを見ると、たしかに現代を思はせます。花柳界でも妓生がなか〳〵優勢ぢやないのですか。內地藝者は一體に粒が揃つてるやうです。昔のやうに一見恐怖を感ずるやうなのは無くなりましたね。その代り少數の傑出したのは、やはりあるにはあるのですが統監府時代は實際『全盛』でした。『統監府小間使』なんてものがありましたからな。鶴原さん、木內さん、第一銀行の市原さん、數へると故人が多いやうです。三島君もなくなつた相ですね今でも『さかん』なのは岡喜七郎君位なものでせう。木村雄次君も此頃は、保險屋に納つてゐますよお山に洋行といふことが初まつてから、皆さんが溫和しくおなりですと某老妓がいひましたが、それより運動熱なぞで、淺酌低唱趣味が衰へたのでせう。それにチヨンガー生活も少いでせう。これで、人間が萎けて、小さく固まらなければ、先づ申分ないですね。

◇

讀書家も、却つて東京の役人より多いのかも知れませんね。古本屋を覗いて見ても、割合にいゝ本があります。絕版のちよつとした珍本でも掘り出さうかと樂みしてゐます。

◇

カフエーなんかには可なり物凄いのがゐますね。藝者は、身裝からいつても、藝事からいつても白山や、つのかみよりは一般にぐつと優つてゐますが、カフエーの女は全然植民地式で東京とは違ひます。しかし藝者も今少し話のできるやうにならないと、まア夫れで奧さん方が安心な譯でせう。晉樂會にでもゆかうといふ若い人達は三味線や踊りより、話し相手を藝者に要求するでせう。少し惡まれ口ですが、奧さん方も一段の努力を要しますね。第一、今の低級な婦人雜誌を愛讀される奧さん達ぢやないですか。

◇

東京の職業婦人なぞも、頭はまだ充分近代的ではありませんね。進んでゐる女文士なんかでも、女といふものでなかつたら、迚も口すぎは出來ないでせう。何一つ專門的の知識のない人でも女流評論家で通つてゐますからね。女記者女優、大抵その程度です。

◇

女優といへば、松井須磨子、アレ位のは今もありませんね。僕とは同鄕で、須磨子の兄や姉は、學校友達ですが、須磨子だけは知らないのです。兩親もよく知つてゐます。父親は村會議員なぞやつた田舍政治家で、酒呑みで、巡査と喧嘩して官吏侮辱罪でやられたこともあります。山林のなどで縣知事を相手に訴訟を起したり、なか〳〵剛情我慢な男でした。これは須磨子の幼時になくなりましたがお袋さんは達者で、須磨子の遺產で安樂に暮してゐます。大阪で初めてハラを見た時は、驚きましたね。一しよに行つた長谷川如是閑土屋大夢などいふ惡口屋も大分感心してゐました。大夢は翌日大阪朝日に社說を書きましたから大。それには西村天囚も顏をしかめてゐましたつけ。しかしその後、僕が歐米から歸つて、マグダか何かを見た時は、大分眼が肥えたせいか、アラが見えて仕方がなかつたです。貴婦人がコーラス、ガールのやうな身裝をしたり、おしやれの貴族が鋲の打つてある靴を穿いてゐたりするのが、幻滅感を强めたのでせう。

◇

米國では芝居や寄席へよく往きました。記念に筋書をもつてゐますが、忘られぬのは、メトロポリタンのオペラです。就中ファーラー夫人のトスカなぞ、血の湧くやうな强い印象が殘つてゐます。トスカはすつかり日本人向きですからな。

◇

當時初めて三浦環夫人も紐育でやりましたが、日本人としては可なり豐かな聲量ですが、どうも貧弱でした。肝腎のところで、聲がきれて了ひます。米國で持てるのは、ジャップでアレたけ唱ふのは感心といふ位のものでせう。

◇

# 京城雜筆

洋行して何を驚いたかといへば女の綺麗なことです。上流社會の婦人を見るは、オペラか日本協會の夜會位のものですが、普だんサブウエーなどに乘り合せる職業婦人なぞにも、傾國の美がザラ〳〵にあります。女學生は日本のやうに著飾つてゐないし、お白粉なぞつけてゐないので、左程目に立ちません。

當時紐育州の婦人參政運動は猛烈なものでした。毎夜辻々に妙齡の美人が演說をしては、合間に徽章や何かを賣つて運動費を集める。僕も屢々買はされて、そのうちの二つ三つは殘つてゐる。演說に對して野次るものがあると、辯士はムキになつて辯駁する。時には聽衆に質問を投げる。その答がノーであつたりすると、反覆叮嚀に說明して、分りましたかといふ。まだ不賛成だといふ。すると又一とくさり講義を初めるといふ調子で寄席にゆくより面白いので、いつまでも聽いてゐました。見とれてゐたのだらうつて、まさか。

◇

米國のハイスクールを卒業した普通の婦人は政治上の知識なら先づ一人前です。日本の新らしい女なぞ迚も敵ひません。僕の下宿したのは辯護士未亡人のとこですが毎朝新聞を讀んでは何か分らぬことは訊いて見ると、大抵は知つてゐる。新聞を讀んでも小說や社會記事許り讀む連中とは大分違ふやうです。

◇

男女の風儀ですか。夕方公園なぞへ行くと面喰ひますね。娘の時代は堅いつて話でしたが、さうでもありませんね。しかし男女の自由な交際をしてゐる割合には過ちは少いのでせう。日本人の皿洗ひや、何かで合嬢と親意になつて、一しよに野外へ遊びにでもゆくやうになると、もう充分御思召があるものとばかりに、手を出したりして、横面をなぐられたといふやうな例も少くない相です。中には關係をつけて、親から訴へられて臭い飯を食つた奴もあります。紐育の法律では滿十八歳以下の娘では、假令先方から誘はれても、年長の男の方が誘拐罪になるのです陪審官は皆日本人が悪いといふことにするのです。序ですが夫婦でも何でも男女の訴訟は、大抵女の方が勝つやうです。日本でも陪審制度が實施されると、女と喧嘩はできませんね。その代り、今のうちやつて置くか。

◇

東京の女は、近來非常に美しくなりましたね。どうも婦人も頭が發達すると、それだけ美しくなるやうです。男だつて教育の有無は顏に現はれてゐる筈です。しかし顏の春情や化粧の近代的な割合に頭が夫れ程進歩しない婦人が多くはないでせうか。

◇

尤も女賢うして牛賣り損ふとか世間によくあることです。牝鷄曉を告げる家庭には、成るべく近づきたくありませんな。や、牛といへば大分牛の涎になりましたから此邊で。

# 破顏一笑

瀨戸病院長　瀨戸潔

## 烏の雌雄

六十五歳の老人、六十二歳の老夫人を伴ふて僕の處に來た。兩人下痢を病む。其老婆曰く『年甲斐もなく内のおやぢがこんな病氣を背負込むもんですから』。話の途中から老爺憤慨して曰く『俺が病氣があるからソバへ寄るなと云ふのにこのババがヒツ付きやがるもんだから……』。

## 迂濶千萬

佐藤博士の御話（二月號）の通り内地には朝鮮等に就ての知識は徹底してないのは事實だ。

昨年文部省督學官某、支那朝鮮に出張を命ぜられ、青島から大連に廻るから案内を賴むとの手紙を出した、其宛名が面白い『大連日本總領事館』――と、處で其手紙が民政署に著くと、署員憤慨の餘り之を新聞屋さんに見せたから大連の新聞は督學某の愚を盛に書き立てた、其日に某氏が大連に來て方々を訪問すると、何處でもこの話が出るので遂々コソ〳〵逃げ出した。斯んな話は我々の屢々耳にする處である。

# 日本民族

總督府醫院外科　松井權平

或る頃土器石器の蒐集流行し自分も其趣味を覺へ、可なり多數拾集した事があつた。殊に鄉里は武藏野の西端で、先史原史時代の遺蹟が、殆ど到る所にあると謂ふも過言でなく、採集が容易なのである。同好の村翁青年の蒐集品を見て廻り、又一部を東大人類學教室に寄贈し、職員から種々教をうけたりしたが、卒業後次第に不精となり、時に遠方の知友から石器など惠まれた位で忘れかけた。仙臺在住當時龜ヶ岡土器の破片の採集を心掛けて果さず、渡鮮後一度博物館で僅かに咸北の石器土器を見ただけである。之も先年大山公がシベリアで採集したものゝ同一系統であらう。鄉里附近で石棒が神社の境内にあつたり時に神體として祭られてある所もあるが、元來石棒はアイヌ族の信仰崇拜物であつたと云ふ事である。之を吾人祖先が祭祀し、又神域に置いたのは恐らく先住民の神聖視した土地や事物に敬意を拂ひ、後代遂に神に崇めるに至つたのであらう。依之見るも亦アイヌ土器と古墳と近い所にある點など、アイヌと吾人の祖先とは親密であつたらしく、想像される節が存して居る。武藏の國造は出雲系の人で、土器の製作も盛んで、埴輪も多く、大鷲神社は大土師神社で、土師氏の祖神であらうと人類學教室で柴田氏が語られたのも記憶する。厚手式土器は山地森林帶にあり、狩獵を生業としたアイヌの作つたもので、薄手式土器は海邊に住した漁人の使用したもので、貝塚に跡を留めて居る。北の方は云ふ迄もなく、畿内、四國、中國に及び、九州は南部より流球に迄分布して居る。大古カイ。コシ。と呼ばれたアイヌ族が衣食を索め、配偶者を求むる外に、土器に種々意匠を施し、紋樣曲線を畫き、雲母を混し、美觀を添へたなぞ奥ゆかしい所がある神話など宗めし豐かな美しい空想で構成されたものもあつたであらう。此先住民を西方より新に渡來侵入した出雲派天孫族が壓迫した出雲系の祖神素盞嗚尊は、コシの八岐大蛇を退治給ひ、後裔なる大國主命は、コシの國々を征服し、コシの少彦命と協力して國土を平定し、又コシの沼河比賣と結婚せられた。出雲系とアイヌ族とは、爭鬪もしたが親密にもなつた。又大國主命が網で一網打盡的に勦討された穴居の倭小な土蜘蛛種は何物か今に見當がつかぬさうである日本先住民族で、銅鐸を持參した人種がある、考古學者の疑問の品物で製作した場所が國内にまだ發見されない。主として近江琵琶湖邊から發見され、北は越前東は遠江、南は四國、西は備中、伯耆で、九州から未だ發見されないと云ひ、又肥後に一個出たと云ふ（マンロー）。之を亡命秦人が傳えたと云ふ說（喜田博士）と、印度支那族苗、シヤンの如きが銅鼓を作りその初期のものは形狀、模樣銅鐸に似、加之分折の結果も兩者の質近似して居るから之に關係あるらしい（鳥居博士）とする學者とある。然らば倭小な苗を土蜘蛛と假定出來やう。唯南方から渡來したものが九州に跡を遺さず永く足を止めず直ちに本州中部に入つた點に疑がある。之とアイヌとの交渉はどうかコロボックルに似ては居まいか。文化の程度は寧ろアイヌより進んで居たではあるまいか。遺憾ながら銅鐸は他の物と一所に埋まつて居ず時代を比較する術がない。支那史に記載する干族に近い民族で朝鮮半島の南端から九州北部に住居し漁撈に長たじ倭人は、風俗が吳楚閩越等南方種に似、且つ支那に往來し之に臣事して居たのであるが、之は印度支那族と北方蒙古種の混血で、之と土蜘蛛との關係は、後者が古代渡來者と見做さる可く、前者は後期渡來者と想像される。さすれば其分布區域九州と中國西端位のもので辻褄は合ふ。ペルツが明治功臣の鄉里に從ひ、長州型と薩摩型との二型に分ち、前者は白人種を混ぜる蒙古種であつて、前期に渡來し今尙長身にして優美な容貌を有し其後裔を認め得る。後者は純蒙古種で後期の渡來者で體骼頑健。容姿風流ならぬ點で識別されると論じた。前者が出雲派なら、後者は直系の天孫派に當る。マンローの如きも埴輪がカウカス人に似るを指摘して居る。出雲派は天孫系なる事は異論がなく、且前期の渡來であることも明かで、屢々朝鮮半島

に往來した形跡もあり、アイヌ族と混血した樣子もある。其渡來と天孫降臨との年代の隔りは左程大きなものではあるまい。從てペルッの擧げた諸點は餘り兩者の距離が大きい、天孫族の遺蹟のない薩偶の地方に蟠屈して神武天皇御東征後勢力を增し、熊襲と呼ばれ後に隼人と云はれ奈良朝時代迄別種と見做された民族がある。寧ろ薩摩型は文字通り之に當て嵌め一書に記載するが如くインドネシアン族或は此雜種としたら妥當ではあるまいか。彌生式土器や鉄に就ても南方種屬が關係ありとせられ、マレイの血統のあるらしいことは久しく唱へられて居た。出雲派、天孫派、アイヌ、倭人等に就きては定說があるが土蜘蛛熊襲等は如何なる種族か不明なのである。何れにせよ諸種の民族が天孫族に統一され渾然融和し日本民族が成立したのである。原史時代、有史時代に亡命せる漢人も之に加はつて居る事は勿論である。近頃生物學的方法即ち赤血球屬間の指數で民族を研究する決があり他日此方面より面白い事實が發見せらるゝかも知れない。

# 京城醫界雜話

平田幸一郎

京城の町醫者——所謂開業醫の人たちの半面を書いて見る▲池田先生（南山町）ねつから曖昧のない人だがつき合へば、ぞん外面白いとこのある人、この頃は、活動寫眞のフイルムを作ることに、夢中になつてゐます。これが道樂▲詩の大家は安東（長谷川町）さん、碁の大家は、佐藤伊藏（明治町）さん、碁といへば、杉本（本町）さんも仲々强いとの評がある、杉本さんは亦杏林の論客でもある▲小林先生（旭町）は、大底の會社の囑託醫である、つまり如才ないといふ長所がある、ゴ自慢は、鐵砲と犬とである▲小山先生（旭町）は、不思議の魅力を有つて居るといへる、ナゼなら殖銀の櫻井さんなど、この人の一服でなければ總ての病氣が治らぬと迄、いつて居られる▲中島先生（明治町）謠は仲々うまいものとの評がある、繪も稽古して居られる、町内でも評判が宜い▲古城さん（明治町）球撞きに熱心である、仲々の論客……論客といへば、岩田（長谷川町）さんも仲々の雄辯、イヤ奇骨稜々居士である▲理財に長じてるのが、一色先生（本町）これは醫界第一のもの持、苦學力行して今日に至つたのは本田（黃金町）さん、それゆへ親戚の世話など、仲々よくすると言はれて居る▲骨董通が高木さん（本町）ダルマ踊の名人が今村さん（若草町）お金があつて休みには盛に行くのが和田ドクトル（明治町）その他頼戸先生や、衣笠先生、工藤先生など、いつも雜筆でお馴染につき、こゝに蚯足を添へますまい、御免。

## ◈東西南北集

吉田莊一

大塚内務局長の禁酒もいよ／＼ほん物となつた▲それに池田殖產局長が全く飲まぬ、昔は三升位ぺろりとやつた人だが……▲局長中隨一の酒豪は草間財務、それに弟子と來て居る、翌日勘定書を手にして『ハテナ君の處へ往つたかナー』ぼかんとして居るなどは大愛嬌▲義太を一寸遣る、夫人の長唄はこれはほん物、素人藝でないとの評▲渡邊商議會頭一眼だけは助かるとの醫者の話に『一蕾は先づ開きたり山椿』と詠んだ甲斐もなく矢張りいけなくて『一蕾はまだ蕚の中紅牡丹』は、兎に角同情にたへぬ▲しかし、元氣は例に依つて旺盛、益に變聲をあげて居る。

# 三壽翁

——澁澤、大倉、馬越三翁の事ども——

朝鮮佛教社　中村健太郎

◇

私は、昨年の盛夏を東京で暮した。その時同民會のことに就て、朝野の名士百數十名に逢つた。そして澁澤、大倉、馬越の三氏にも御目に掛る事が出來た

◇

一流の實業家などは夏になれば、大抵別莊などに往つて、誉澤三昧にやつてゐるやうに考へらるゝが、中々さふではない。三日や五日位づゝ交替に、休養したり別莊に往つたりする位のことは勿論あるが、其の他は早朝から夕景まで、ミッシリ働いてゐる。

◇

私の最も激勵されたのは、又最も尊敬せざるを得ないのは、子爵澁澤榮一翁である。先づ其の精力の旺盛なる點に於て、其の徹底せる同情心に於て、神樣とは、多分此の翁の如き人を神化せしめたものではないかと思つた

◇

翁は、八十有六の高齡でありながら、毎朝門前市を成す處の來客を相手にして、何からかまで、深切に指導して居らるゝのである。私は、いつも午前八時半頃に、御尋ねするを例としたが、多い時は十人位、少い時でも、五六人の先客が待つてゐる。

◇

執事の話によると、翁は、午前七時頃までに、朝飯を濟まされ、それから應接間に出らるゝのである。翁の一般に應接せらるゝのは大玄關から衝き當りの日本間で、廣さ十疊位西洋室の應接間もあるが、それは滅多に使用されない。

◇

自邸への訪問は、大抵午前十時頃迄に切り上げて、それから茅場にある澁澤事務所に顔を出して、何かと指揮をされるのである。其の間にも、また時間を利用して、親ら人を訪問さるゝこともある。然も翁は、盛夏の候に青年等は、薄い白服でやつてゐるのに、厚いフロックを著用して居らるゝ。

◇

翁は、八十有六の高齡と言はるゝが、其の顏色といひ、音聲といひ、視力に於ても、聽力に於ても、壯者を凌ぐ精力には、只だ〳〵驚くの外はないが、兎に角人間は、一生縣命に働くことが唯一の長壽法だらうといふ確信が、翁に依りて與へられた。

◇

また大倉喜八郎男と馬越恭平氏とが、澁澤子爵に並んで、絕大の精力家である。大倉翁は、八十九歲、馬越翁は八十二歲、何れも、普通の人間の壽命から



十年も二十年も通り越してゐる人達である。然も只だ高齡だと言ふばかりではない。其の壯者を凌ぐが如き精力に於て、吾人に一種の教訓を與ふるのである

◇

大倉翁は、麻布の本邸が、大震災の時、火災に罹つたので、當時は、向島の別莊に住んで居られた。一度其の別莊を訪ねると、最早やお出掛けだと言ふので、家人に翁の日常生活を聞くと、翁は毎日午前の十時には、銀座の大倉組に出勤さるゝとのことである。

◇

翁は曰く、『若い者は、夏になると、休みたがる者もあるが、私は、毎日こうして出勤する』と、何と壯な話ではないか。一寸見た處、六十四五歲位にしか思はれない。眼も耳も、達者なもので、一間も隔てながら、相手の話を立派に聞き取り眼鏡などは、固よりかけて居ない。

◇

試みに『貴翁は、その御高齡で御目出たうございます』と挨拶すると、翁は眼を細くして喜びながら『老いて益々壯なりといふけれども、年を取ると、そ

うは參りません』と、

僕曾て、本町で清谷師

# 京城雜筆

うは參りません』と、謙遜はするが、青年共に負けるものかと云はぬばかりの元氣だ。

◇

馬越恭平翁に至つては、澁澤大倉の二翁に比ぶると、まだ年も若いが、その精力の旺盛なことには、只だ〳〵驚くの外はない。翁も震災に罹つて、麻布本村町に假住したゐるので、惠比壽の日本麥酒會社にお訪ねすると、忙しい處を繰り合せて直ちに逢つて下された

◇

初對面に先づ驚いたのは、豫て八十餘歲と聞いてゐた翁が、白の會社員の著るやうな詰襟の夏服を著て、顏に一つの皺もなく、艶々した顏色で、その態度といひ、その音聲といひ、五十五六歲位にしか、どうしても見へない程の若々しさである試みに、今年お幾つになられますかと尋ねると、『恰度八十二歲です』と只だその精力には驚くの外はない。

◇

私は、最初澁澤老子爵にお目にかゝつて、人間は働くことが何よりも長壽法だとの信念を得たが、更に大倉、馬越の兩翁よつて、益々その信念堅固した

# 交友錄

## 雜筆書屋主人

私の宅には、前々から老人のお客樣が多いこれは、私が將棋を差すからであらう。御常連だけで、七八名はある。そして、それ〳〵人間としてのもち味が變つて居るから面白い今、二三人について、略記して見る。

### 服部先生

服部先生は、明治町の人である。古への儒學者は、かうもあらうかと思はるゝ程、固苦しい人である。亦行儀作法の、丁寧懇切なのは、そゞろ古へのお武家を偲ばしめる。先生は、仲々の學者で、所謂識、古今を貫き、學東西を談ねる。就中易陽學、茶、書畫はその最も得意とせらるゝ處僕とは棋道の知己であるが、先生は失禮乍ら强手ではない。私は、先生と清谷惠眼師との對局が、天下一品であると思ふ。といふのはこれほど莊重威容の先生が、一旦將棋となると、弱音を吐かれること〳〵、殆んど一手々々に『歎き』があるのである。甚しきは、勝つて居られるのに、尙先生は、愁歎して居られる。一方、清谷師はと見ると、これは一歩をとつては樂觀し、一駒を進めては、氣焰をあげ、現に敗局收拾すべからずなつても、尙天下をとつたやうなことを言つて居る。ひとりは歎きの一方、他は樂天一點張り。僕はこんな愉快な將棋は見たことはない。

### 清谷師

清谷師は、苑南洞の人である。もと桑門の出であると聞く、併し人間味最も多く、朝からきこし召して居られることが珍らしくない年中、大型の黑鞄を帶同し、氣ぜはしさうに東奔西走せられる。元氣な將棋で、一手差しては哄然と笑ひ一駒動しては快然として放笑する。勝つて笑ひ、負けて笑ひ、世界中の喜悅を一人で代表する。

僕曾て、本町で清谷師に捉へられ、無理往生に、御馳走になつたことがある。師曰く『あたし今日成金でつせ』と、のち事情を訊くとブローカー開業こゝに十七年、その時初めて儲けたのだと、そこで『お目出たう、何ぼう儲かりました』と訊くと、『五十圓だんね』

――『へー五十圓』僕二の句がつげず、併し道に擁して、喜びを分つ心意氣は、實にたのもしい。爾來、電車の中から、てく〳〵と街上をてくる黑鞄子の後姿を見つける時、僕はいつも『天よ、あの鞄に金五萬圓をめぐみ玉へ』と、覺へず祈りたくなる。

## ◈一笑退却

平田久雄

殖銀の渡邊さん、用事があつてお訪ねすると椅子から半分のび上り『まだ、まだ〳〵、まだ〳〵〳〵〳〵』と、兩手をひろげて、向ふへ押すやうな恰好をする▲これは、原稿がマダ出來てゐないとの合圖だ▲その形狀實に奇異なり▲アレは、ゴルフの身振りか知らむ▲記者、笑ふ〳〵退却する。

# 京城雜筆

## 魚の夫婦

總督府　萩原彦三

春には早かつたが、晴れた日の南の多島海は如何にも暖かつた。波靜にして鏡のやうな藍碧の海に投げらるる午に近き日光は、見るから和やかな溫かな感觸を覺えさせる。船の輕い動搖も、一種の律動を爲してゐる機關の響も快く感ぜられて、如何にも長閑な航海であつた。後甲板の椅子に倚つたW博士は、しきりなしに煙草の白い煙をあげながら、休みなく語つて居た。

人類の原始的生活狀態は、別段夫妻の別がなく共婚の狀態であつたと云ふ說があります。從來の有力な社會學者などの主張は、大概此の說であつたやうです。けれども動物學者や生物學者の中には、之に反對して人類以外の動物でも例へばチンパンヂーにしても、又其の他の猿類にしても、一夫一婦のものもあり一夫多妻のものもあるが、チヤンと定まつた家族生活をして居るのもあるンですから、況んや人間に於いてをやと云ふ次第で、原始的なる人間の共同生活が、共婚にはじまるとは云へぬと云ふので、反對してゐるものが多いやうです。一體古い頭の先生たちの信條では、家族制度は、人類獨特のもので、人倫道德の中心は此の親子夫婦と云ふものである、之が人間と禽獸とを分つ標準であると主張してゐるやうです。そんな老人達の前でウッカリ反對しやうなら、非常におこられます。が然し之は大變な間違です。爬蟲類のやうな下等動物でも、調べて見ると立派に家族生活をして居るのがあります。鳥類以上の有背椎動物には澤山そんな實例がありますだから近頃の社會學者の中には、我々と同意見で家族制度が人間の特質であるなンて言はぬやうです

調べて見るとなか〳〵面白いものですね。內地や朝鮮なぞに盛に繁殖してゐる蛙のうちに、殿樣蛙といふのがありませう、あれの一種で、よく小さな子蛙を背中に載せて泳いでゐるのを見受けますがあれは雌ぢやありません。雄なんですよ。つまり子供の保護養育は夫の任務になつて居るのですね。這な實例は鳥類にも澤山ありますつまり下等動物の中にも、親子の情愛、夫婦の情愛があるンですね子供の保護養育を妻君に任せきりにして、自分は好き勝手に飛び廻つて、すまして居られる人間の方が、むしろ自然にそむいたやり方ですね。そりやほんとですよ。

ところが魚の中にも一夫一婦の交りをして居るのがあるンですから、妙ですね。南朝鮮の池や沼又は泥深い川なぞに棲むでゐる魚にかむちとかかむるちーとか云ふのがあります。黑ッぽい魚で橫腹に蛇絞のやうな模樣があつて、見たところ餘り氣持がいゝ魚ぢやありません。京城附近の朝鮮人はかむるちーの先祖は蛇であつたのだ、それが段々世を經るに從つて、雄は其の儘蛇となり、雌は變つて此の魚になつたンだと信じてゐるそうです。それどころか西洋人のつけた羅典語の學名まで蛇頭魚となつてゐるのだから、驚くぢやありませんか。何でも朝鮮では非常に精分が附くと云ふので、產婦に食はせたり何かすると云ふので、例の宗魚に次いで珍重せられるそうです。値段もなか〳〵いゝと聞いて居ります。

此の魚の卵は水に浮くンです。淡水魚の卵は一般に沈む筈ですがそれが浮くンですから此の魚はまア珍らしい方です。六月頃から水のあまり流れぬやうな池の汀の、茅の葉なぞの水面に浮いて居るやうなところを見つけて、卵を生みます。卵が浮いても茅の葉に妨げられて流れぬ用心をして生みますそしてかむるちー夫婦はチットその下に潛むで保護してゐるのですところがその浮いてゐる卵を見つけて、蛙なぞがそれを食ひにやつて來ます。するとかむるちー夫婦が下から出て來て死力を盡して卵を保護するのです。朝鮮人は此の習性を利用して、かむるちーを極めて容易に、然も二四一遍に捕へるさうです。それには靑い蛙の形をしたものに針をつけて、此の魚の卵の浮いて居さうなところを選んで、その針を投げると、かむるちーの先生我子の一大事とばかり一生懸命に飛び著いて來るさうです。自分が負傷をして血を出しても決して止めぬ。雄が捕へられると、雌が鬪ふと云ふ具合で、二四は一所に容易にとれるさうです。

# 京城雜筆

なか〳〵向ふ息の強い、珍らしい魚です。内地には元來居らぬ魚ですが、近頃淀川に移殖したとか聞きました。もひとつ此の魚の親類分に朝鮮金魚と云ふのがありますが、是も一夫一婦の魚です。――

眼を擧げると、送り迎へた幾多の島山もいつしかまばらに、遙か彼方の麓に、我等の目ざして居たT町の甍がキラ〳〵と日光に輝いてゐるのが見え出して居た。（一四、三、二三）

## 鬼

不二興業會社　澤村九平

――道逢羅刹難。背陰向太陽。

或る旅人が道で鬼に逢うた。鬼はいきなり其旅人を取つて食はうとした。心を落著けてつく〳〵と其の鬼を觀てゐた旅人はかう鬼に頼んだ。

『今生の願だからたつた一つ私の問ふ事に答へてはくれまいか』。

鬼は早速承諾した。喜んだ旅人はかう尋ねた。

『見る所あなたは背が黑くて腹が白いが一體なぜですか』。

鬼の答へはかうであつた。

『自分はいつも太陽に背を向けてゐる（太陽に向ふと直ぐ死ぬ）からだ』。

之れを聞くや否や旅人は身を飜して太陽に向つて逃げた。かくて之れを追はんとした鬼は太陽に直面した爲め死んでしまつた。

人生は一つの道路であり我々はそれを行く旅人である。我々を亡さうとする鬼は到る所に――心の中にまで――起伏してゐる。此の旅人の處置は處世上大いに參考になることと思ふ。

## 元山から

加藤松林

昨日も今日も暖かい日がつづきます。途中一寸寄り道をしたので昨夜此處へつきました。元毎西田氏の配慮でこの二十一、二十二日開催のことに決定いたしました。

それ迄は用もない身體、そこいらを歩かうかと考へてゐます。今年の夏は金剛山へ行かれませんか西田氏もさう言つてゐます。

四方の山の頂は一面の殘雪です蒼い空にくつきりと白い姿の堪らなく美しいこと、それに、また草枯れの野の美しさも限りないものです。

昨日汽車で一緒になつた大阪の商人は、宛然夏のやうですねと言ひました。ほんとにそのやうな明るい暖かい陽ざしです。今年になつて初めての旅の幸福さ。いづれまた（元山喜久家にて）

## ◇講演のぞ記

吉田莊一

四月十三日、土木協會の講演會が朝鮮ホテルで開かれた、三矢局長が、能率といふことに就て、安い工費とか、短時間に澤山作るとか言ふ以外に、良いもの、しつかりしたものを作らねばならぬといふ例に、丑五郎のやぐら（炬燵）と長七のやぐらとの比較談をせられたが、それは幼時の追憶談で、頗る深い感銘を聽衆に與へた▲そのあとで平井學務課長の『朝鮮の未來』といふ話――興味多きエジプトや印度の視察談を交へ、叙景などの修辭も美しく滔々二時間半、例に依つて聽衆を魅了。

# 日本刀

中央婦人病院長　衣笠茂

而して此國家的至寶を保存するは少數の愛好者のみの能くする所にあらず、須らく一般有識の志士の一致協力によりて初めて其効果を全ふすべきのみ、斯の如くしても尙先般の如き天變地異により又は火災により年々廢失する數も益々多數に及ばん、而して今後古刀と同價値のものゝ製出せらるゝ機會は絶無と稱して敢て過言にあらざるべしと信ず、豈に寒心せざる可けんや、若し夫れ新に刀劍を研究賞鑑せんとするの士あらば新任の三矢警務局長は斯界の精識なり、機會を以て寸暇を割愛せられざらん事も無からんと信ず、又殖銀の櫻井、深尾兩理事は極めて熱心なる研究家なり、諸士は宜しく就て其高論卓說を聽かれたい。

○

神洲由來正氣あり發しては革朶の櫻となり、凝つては百錬の鐵となる、實に日本刀は大和魂の權化と云はれ、武士道の精髓にして光怪陸離、懦夫を起たしめ、利刄一閃、鐵兜を斷つ、其威嚴寔に偉大なりと謂ふべし。

近世科學の進歩に伴ひ火器の效力著しく發達し、一時戰場の運命は火戰に依つて左右せらるゝの觀を呈せしも、日露戰爭の實驗は却て此傾向を否定し、勝敗の決殆ど白兵戰に依つて結ばるゝに至る、諸外國相互間の戰爭は知らず我大和民族の戰爭の場合今後と雖も此傾向は變化無かる可し、是れ則ち刀劍の物質的效力のみならず、却て是に由つて與へらるゝ精神的價値の偉大なるに想到せざる可からず、之れ我民族が諸外國に比し一假りに科學的兵器に劣る點ありとするも——戰鬪能力の優越なる所以たらざる可からず。

如斯日本刀の眞價は現今に至ては其物質的價値よりも寧ろ精神的方面即ち大和魂の涵養に與つて絶大の効果あるものにして、今日の如く一般思想界の惡風潮の瀰蔓せんとする際、殊に其感を痛切ならしむるものあり、然るに明治維新に佩刀の令發せられて以來、名刀空しく櫃底に藏せられ、漸く錆變腐朽せんとし、只其一部のみ所謂數奇者連の骨董的趣味によりて愛玩せられ、或は商人の利害關係よりして海外に散逸するものすら尠からずと云ふ、廢刀の令豈に日本刀其物を排するものならんや、況んや其精神をや。

○

吾輩等の父の時代迄は佩刀の時代なりしにより吾輩の幼少の頃は父の友人訪客との懷舊談中武術及び刀劍に關する談話を屢々間接に聞かされ、又父の酒興に乘じ實際に我家に遺れる刀劍に就ての由緒等を聞かされ、知らず識らずの間に刀劍に對する尊敬愛好及び趣味性を涵養せられたり、故に刀劍を一瞥しても尙ほ且つ其感激相當に深し、然るに大正生れの子供は多くは佩刀時代の人の孫に當り從つて直接の實話を聞く機會は極めて乏しく即ち刀劍に緣薄し、今後一層其傾向を增すのみならん、而して之が日本建國の大根元たる忠君愛國と云ふ堅實なる思想の退行と一致しつゝあるの感なき能はず、豈に歎息の至ならずや、吾人は祖先の貴重なる血液を受續ぎ、之を自己の子孫に迄延長すべき責任あり、斷じて第二の難波大助を出さざらしめん事を期せざる可からず之には學校教育と家庭教育と相俟たざる可からず、而して此方面の家庭教育の材料として日本刀は最も優秀のものたらずんばあらず、

## 京城雜筆

### ◈棋界の恩人

平田久雄

京城の將棋界は、ちつとも振はなくなつた▲さう言へば碁の方だつて、ちつとも振つては居ないけれど……▲一時高橋辯護士が、力を入れた頃は仲々盛んなものだつた▲今は同氏も忙しい、それ故寄りといふものが全くない▲棋界の恩人といへば、先づ右の高橋氏と、櫻井秀事氏だらう▲櫻井氏は、實に腹の奇麗な人だ、そしてこんな仁俠な人は、當世には珍らしい▲どんな棋客でも氏には世話になる氏は默つて金をやる、家をもたせる、少しも恩にかけぬ、現に五段級の人が一人世話になつて居る▲而かもそれは將棋許りでない。氏を知るほどの人は、みんな何等かの方式で、盡力を得るのである▲天日氏や、小杉氏が今少し棋界を顧みてくれると宜いのだが。

# 馬車に乘つた頃

旭町一丁目　内田竹三郎

これは吾輩の回顧錄である、三十年前の青春時代を追想し、禿筆を騙つて、感懷を暢叙せしものである。當時吾輩は、土方久元伯の書生である、玄關番だ。

――それ故文中『阿爺』と呼び『おやぢ』と呼んだのは、總て同伯と御承知ありたい。

○第三次松方内閣――所謂松方土崩内閣の末期、改造亦改造の末、何時も產婆役の阿爺が、誰も彼も大臣は御免だの末、日頃兄弟以上に親密な河野敏鎌子爵（當時農商務大臣）に口說かれて、遂に農商務大臣に就任した。馬鹿な譯さ、親任匆々挨拶に來たのが、次官西村捨三氏、悔みに來たのが、宮内次官（日本赤十社副社長）花房義質氏、樞密院副議長東久世通禧伯多分其時は、今京城の新聞團が特權階級だ、華族だなどと、イヤに別扱ひして居る、京城日報社長副島氏の御親父種臣伯が内務大臣だつたと思ふ。副島伯と、ウチの阿爺は同藩の上に、殊に親密であつたから、能く往復して居つた、我輩も何十回となく副島伯の許へは使にやられた。全く爾汝の親交であつた。一日何れからか歐文の招待狀が來た、恰度來合はして居た副島伯と、二人で讀んだが、良くは判らぬらしく、即坐に我輩が近處の樞密院事務局に、有賀長雄書記官（文學博士、法學博士、後に袁世凱の顧問）を訪ねて意譯して貰つた事もあつた。

○阿爺が大臣時代、秘書官は、今の伯爵内田康哉氏で、何んでも高等官四五等位だつたと思ふ、そこで今一人秘書官入用なのだが、花房直三郎氏（後に文學博士統計局長）其他へ交渉したが、皆前途風前の内閣、誰も諾と云ふ人がない是非なく兼デモ付きで、斯く申す我輩が青春二十一歳にして、秘書官事務取扱と云ふ樣な役目で、外事は康哉君、内事は我輩と云ふ譯處が二人とも、内田ではと云ふので、大内田、小内田と呼ばれて居た、當時阿爺の本邸は麴町區三年町、農相官邸は富士見町で、お堀端、別邸が高輪南町、大臣用の馬車が三臺もあるに、ウチにも二臺ある、馬車馬は使はぬと足が悪くなる、高輪別邸には我輩が毎日見舞はねばならぬ用務がある、馬車はあいて居る、馬はセメねばならぬ、おマケに高輪と富士見町は約二里もある、其處で我輩が馬車常用と云ふ譯、二十一才の壯丁にして斯くの如し、四十歳位にもなれば天下が握れる位は我ならなくに誰しも烏頂天になるではありませんか、現に大内田と號した康哉君が、正二位勳一等伯爵、今一息で侯爵になる處だつたではありませんか。

○三千噸級の軍艦、秋津洲が、阿爺の大臣時代、横須賀で進水式擧行、明治天皇が行幸あらせられた供奉に松方總理、他は知らぬが、ウチの阿爺、延いて我輩も同じく御召列車に陪乘して、お供した。海兵團の前に臨時停車場が出來て其處から汽艇で、鎭守府に行幸、御小憩御晝餐後、進水式場に御臨幸、其間約三町餘り盛砂の上を、鎭守府長官の御先導で御徒步、直後の右側に松方首相、左側に阿爺、ソウなると勢ひ我輩が、阿爺の直後御玉步と我輩との間隔約七八尺

○畏れ多き事ながら、年少氣鋭、朴訥粗野の我輩は、玉步の間隔を見て驚き奉つた、松方伯の一倍半阿爺の約二倍（阿爺が跛たるは既述の次第）其處で我輩も、玉步通りの間隔で進むには、餘程の大股に步まねばならぬ、從つて一方阿爺の腰を殆んど押す位の態度で、大股で步いて見た。

○爾來春風秋雨三十年、得意の時失意の時、禍福何れの際にも、室内運動に、公園其他の散策に、天皇步みと稱して、大股に、ユッタリと步む事を、一の心機轉換、沈思熟慮の工夫に應用しつゝある。

○越へて數日、一夜上京の知事七八人を招待すべく、夫人、康哉氏我輩等室内裝飾の準備中、大臣免官の通知が來た、啞然呆然、何の事だい、大臣でもこんなものだ。

## ◈世間ばなし

吉田莊一

滿鐵移管と同時に、弓削鐵道部長が官を辭し、東京に歸つて姑く靜養するといふ▲各方面で、限りなく惜まれて居る▲恐らく純眞な動機から、これほど惜まれる人は、近ごろ一寸あるまい。

# 電氣漫言

京城電氣會社　見目德太

電化臺所は電氣の微妙な働きを巧みに利用したものである、曾ては世の中で最も恐しいものとして地震の次に數へられて居た雷公、雷母も、今日は吾々の家庭に在りて炊爨の用をなし、從順な僕婢の務めに當つて居るわけであるが電氣利用の進歩は日に月に寔に目覺しいものである。

元來此宇宙には物質の外に、エネルギーが有つて或は熱として現れ、光と化し、時に力と變り、又は電氣となりて森羅萬象を形づくり、種々の現象を生ずるものであつて、變化はするが決して消滅すべきもので無いことは近世科學の基礎をなすエネルギー不滅の法則の教ゆる所である。

エネルギーの此一つの狀態一つの形として、電氣は運搬する上に於て、或は吾々が電氣其のものとして利用する上に於て、若くは他の形に變へて使用する上に於て、最も便利なものであり、又最も經濟的なものである、是が今日電氣利用の途が異常の發展を爲しだわけで、世人之を稱へて人力が自然を制せしものとして居るが、事實大自然の模倣に過ぎない。吾々の知識が如何に進んでも、既に大自然の啓示して居る以上に出づることは出來ないのである。

高壓電弧に依り、又はハーバー氏法を利用し、若くはオストワルド、プロセスを用ゐて、不活發性の空中窒素瓦斯より植物の營養に無くてはならぬ窒素肥料等を製造し得るに至れることは近代に於ける科學の驚異的產物であるが、雷鳴の際電火に依りて空中窒素より亞硝酸を生じ、或植物は自ら培養せるバクアリヤの働きを利用して空中窒素を固定し、之を自己の營養に供して居ることは隱れも無い事實であつて、世の開闢以來自然の暗示して居る所である。

電氣孵卵器は其微妙なる電熱の働きに依り一時に數十、數百の卵を孵化せしめ得て、養鷄家に一大福音を與へて居るが、是れ又自然の模倣に過ぎない。

さあれ、自然の模倣そのものは人力の偉大さ、將た近代物質文明の著しき發展さを語つて居るものに外ならぬ。

電氣の最も面白い利用の途は、歐米の園藝家が植物生命の善導を電氣に依り解決せんことを試みつゝあることである、伊太利の植物學者ピロバルト教授は十有餘年の日子を費して園藝電化に沒頭し、苦心の結果植物遺傳の電氣變造を發見したが、此電氣遺傳法は主として園藝稍物の花粉に電磁應用の處理を行ひ、以て種々の珍奇なる變種を創造するものとして人工を奪ふものである。

日光は植物發育上緊要不可缺のものであつて、其役目は炭素同化作用上必要なる部分を演じ、是に依りて植物は大氣中の炭酸瓦斯より炭水化合物を生成するのであるが、現代の科學的研究に徴すれば土壤を通じて送充する電氣の荷電は植物を刺戟し、其結果植物の發育を一層迅速に、一層健全ならしめ、從つて穀物の營養價値を增進し、且つ糖分を含有せしむるの効あるべしと稱せられて居る。其有効なる事由は大地電流が植物根帶の周圍に直接に大氣中の窒素を固定するの事實に在るものと考へられて居るので、則ち植物養生上最も肝要な肥料を釀生するのである

最近の發達に係る電化用電氣器具は無線電波の如き高周波衝動の形に於て靜電氣を活用するものであつて、植物種蒔前豫じめ種子に金屬被層をなし置き、播種發芽後其根毛に靜電荷を蒐集するのである

近代文明は極めて巧な電燈照明に依り晝間を延長して吾々人類に一層長時間の勞作を要求し能率の向上を促して居るが、最近米國ウエスチングハウス社の實驗に依れば、之を植物にまで應用して著しく其發育を促進せしめ得ることを確めて居る。之は太陽光線の放射するエネルギーと白熱電燈の光線の夫れと或類似の點があるから、是等植物の葉綠素に光を加へると同じやうに活氣が加はつて來るからで、植物に晝間の延長を與ふる結果である。

地球上の生物は其エネルギーの根原を太陽より得て居る、太陽より放射するエネルギー、其光と熱とは吾々の生命の根原であるが、此エネルギーを電氣の形に變へて吾人に利便を齎すに至りしことは、正に近代科學の一大勝利である。



杏所の書を識れる人ありとて、態

# 杏所の畫

京城郵便局　橘川克彦

まだ極く若い時分のことであつた。茨城縣下を旅行した折、助川町の旅宿で、或る舊藩時代相當身分のあつた方より出たもので、出所確實なりとの觸込みで、チヤント表裝した十幾本の畫幅を持參し非常に廉價であるし兎に角見て呉れと、書畫商らしきものに坐りこまれ、素より畫の見方も識らず勿論鑑識眼など有らふ筈はないが、父が書畫に趣味を持ち素人としては相當に其の心得もあつた樣な關係からでもあらふが、何も分らぬ癖に觀ることが好きの爲めに、遂に見るともなしに悉皆取り攫げさした中に、青綠山水の一幅があつた。分らぬながらも何處となく筆力雄勁にして精緻、氣韻亦た頗る高き樣感ぜられ、無闇に欲しくなり、遂になけなしの旅費を割愛して買取り、歸宅匆々父に示したるに、眞贋は分らぬが立原杏所の落款にて誠に面白き畫なりと賞し初めて杏所の人格や畫品を聽かされたが、折柄父の懇意な漢學の先生が來訪し、こは趙師雄か羅浮山の梅花を愛し、其山中に假睡したるに梅の精が少女となりて夢に現はれたと云へる故事をものしたるものなるべく、至極結構の逸品なりと大に賞讃を博したので、私かに自慢の鼻を蠢めかしたが、兎に角其向の人の鑑定をと勸めらるゝ儘に出したるに、意外にも或者は畫は杏所なるも落款が疑はしと云ひ或者は落款は杏所に相違なきも畫はおかしいと稱し、又は全然眞なりと云ふものあれば、全く贋物なりと評するなど、結局人毎に異り一として信を措き難く、田舍に於ける書畫の鑑定蓋し斯んなものかと慨然たらざるを得ざらしめられたが、其の後いかに眺めても一向看飽きが來ず、見れば見る程味の增すを覺へ、遂に眞贋は頓著なしに益愛翫するに到り、爾來十數年唯一の床掛として行く先々に持廻はり、夏も冬も無雜作に掛け放し置きしが、大正五、六年の頃大邱在住當時、其の道に明るきらしき人偶然之を見て嘆賞し、其の頃同地私鐵の重役に水戸藩出身の善く杏所の畫を識れる人ありとて、態々紹介して呉れ、其の一覽を乞ひしに、慥に眞物に間違なく而かも杏所の內でも頗る傑作の部で珍とすべく大切にせよとて、大に手持惡きを叱られたが、それから之を聞傳へて時折見に來る人もあり、こうなつて見ると今迄なげ遣りにして置いたのを後悔する樣な氣も起り、遽に箱を作つて所藏すると云ふ滑稽サ其の後は書畫の展覽會で杏所と銘打たれたものに、可なり多く氣を著けて見たが、何うも感心したものなく一見嘘だと思ふもの計りであつた。

杏所の畫の話は唯之れだけであるが、其れ以來書と云はず畫と云はず、一見頗る立派な樣でも見て居る內に何處となく厭氣がさし、見褪めのするものと、初めは左程に感ぜぬが見て見飽かず、見る毎に云ひ知れぬ味の出てくるものとがあり、此の後者に屬するが如きものであれば、眞贋は別として先づ自分としては愛賞しても恥しからぬものの樣に思はれるのである

## ◈狂雨山房記

吉田莊一

鑛業會の德野氏が、引越をしたから一度やつて來いと言ふ▲十二日の日曜に行く▲二疊の玄關と、四疊半の客間、同じ廣さの茶の間、それに小さい溫突がついて居る▲小ちんまりとして、感じのいゝ家だ▲無銘の關物を見せる▲傳家の寶刀で、關の孫六だとある▲何分錆びに錆びて、我々には迚も手におへない▲三矢さんか、衣笠さんへ持込むべき代物▲正眞だつたら百圓だけ雜筆社基本金に献上するといふ▲何時も乍ら奇特なことだ▲極樂へ行けるだらう▲神來の軸二三を見る、どれも面白い▲畫伯と主人とは、當時別懇の間柄、いはゆる商賣氣をはなれて書いて居る▲德野氏有名な菓子道樂だけにいろ〳〵なうまいものを奢る▲それに菓子器がおもしろい、處々方々から蒐集して居る▲話して居る中、二時となる▲つれ立つて今村螺炎氏を訪ふ▲新居は前の官舍のすぢ向ふで、朝鮮建乍ら一寸古雅な家、浪居としては頗る恰好。

# 紳士たるの道（中）

山縣悌三郎

紳士の定義は、前に列擧せるものにて十分に悉されてゐる。また『英語標準辭書』には、教育あり節義の高い、禮節を重んずる、親切なる人と解釋してある。さうして富貴の二者は、純正なる紳士の德と、何等必然的の關係を有しない。故に貧窮の人も、下級の者も其の精神に於て、其の日常生活に於て、固より眞正の紳士となることが出來る。余は信ずる、人は縱ひ其の修養比較的低く、才能不足にして、而して其の富も極めて小なるも、若し品性だに眞價あらば猶ほ能く紳士たるを失はぬと。彼は正直であり、廉潔であり、謙遜であり、義勇にして親切、溫和にして實恕、自ら尊び、自ら助くることを得、約言すれば、眞正の紳士たることが出來る。貧しき人にして、精神に富めるは、富者にして精神の貧しきよりは、常に優つて居る。茲に古い一つの實例がある。昔テイロール及び北伊太利を流るゝアーディーゼ河の俄に溢れた時、ヴエロナの橋流れて、唯中央の橋臺を殘すのみとなつたが、其の上に一つの人家ありて、之に住へる人々は、窓より頻りに救助を喚び、此の橋臺も見る〳〵濁流の爲めに今や落ちんとして居る。偶々群衆の傍に立ちたるスポルヴエリニ伯爵は、聲を限りに呼はつて曰つた『何人にても、かの不幸なる人々を救ふことを敢てしたならば、余は之に百ルーの金を與へん』と。一人の年若き農夫あり、身には粗服を纏へるが、群衆の中より進み出で、矢庭に小舟を突卸して之に飛び乘り、危險を冒して橋臺に達し、其の家族をば殘らず之に移したる後、更に岸に向つて漕ぎ還り、難なく一同を陸に上せた岸に立てる群衆は非常なる感激を以て喝采した。伯爵は曰つた『嗚呼、我が勇敢なる青年よ、茲に卿の賞金あり』と。然るに、此の青年は答へて曰つた『否、余はわが生命を賣る者にあらず、金は此の憐れなる家族に與へ給へ。彼等は今之を要するなり』と。彼は金錢に貧しきも、精神に富み、其の言行實に立派なる紳士である。

余の曾て愛讀せる書の一つにクレイク女史の傑作『紳士なるジヨン、ハリフアツクス』と題するのがあつた。英國紳士の高潔なる品性をば、其の穩健なる筆致を以て寫し出したるもので、何でも其の筋は、彼が如何なる場合にも、基督教的紳士たるの品格を失はなかつたこと。さうして人の立身出世なるものは、必しも學校に由るを要せぬ、將た又順境に由るを要せぬことを誨へて、趣味の間に教訓を藏し、教訓の間に趣味を交へたるものであつたと記憶する、本來此の『ゼントルマン』といふ語は、夫の『ホーム』（家庭）なる語と共に、英語特有のものであつて、他國には、之に適合すべき語が無いといはれて居る。流石に傲岸不屈のビスマルク公さへも、獨逸に其の完全なる意義を表はすべき適當の語が無いのを嘆いたとのことである。

容儀を修め、禮儀を重んずるのも亦紳士たるの資格に缺くべからざるもの〻一つである。日本は古來禮儀の國で、君子國の稱さへもあつた。君子とは取りも直さず完全なる眞正の紳士を云ふのである。中古時代の戰爭に、相敵する二人の武士が、戰場に行合つて、イザ一騎打といふやうな場合にも、相互に禮儀を交換したる奧床しい話もある。德川時代の末期に至りても禮儀作法は武士の嗜の一つであつて、劍を善くし、力が强いばかりでは、眞正の武士とは謂はれなかつた。然るに我が國今日の狀態は如何。神聖なるべき帝國議會に於ける我選良の擧止動作は如何。

## 京城雜筆

### ◈雲華の一軸

吉田莊一

三井物產の住井さんの部屋へ行つて見ると、書やら畫やら六七點もかけてある▲そして當の住井さん雲華和尙の一軸を眺めて『どうです、これはいゝでせう』▲見れば筆立てと硯を書いて、それに枯木竹石とか何とか題してある▲これが氏の支那へ旅立つ前日のこと▲住井さん仲々閑日月がある▲榮轉說などは、一寸ほんととは思へない▲イヤこの手法で行くと、人參賣込の片手間に、屹度五幅や十幅は掘出して來るんだらう▲何しろ氏は人も知る支那通だから。

月かげさむし元山の沖
舟影くゞく風さむく吹たかし陳

# 京城雜筆

## 北鮮今昔

總督府囑託　松田學鷗

一夜無聊、書籠を探つて古き新聞切貼帳を開き見た。

× × ×

拜啓、二月末平安北道を去り、釜山にて恰も春畝統監の渡來を觀て、三月三日上船、同九日雄基灣に上陸、其後豆滿江畔を奔走致居候。氣候尚は寒く雪交りの雨ある時も有之候。江口の地形は遼東半島に似たるが多きも、追々白頭山中に向ひ江源に遡らば峻峰險壑甚しき事と存候。虎は聞きしにまさりて多く、日沒後は土人外出せず過日も手負の猛虎を雄基灣の海岸にて見づけ、遂に土人等と共に射とめ申候。豆滿江口より二里、造山堡に勝戰臺と呼ぶ一峰あり、李舜臣の古蹟なるよし、碑あり左に寫載御參考までに供し候。

嗚呼此即故忠武李公舜臣破蕃胡之所也。萬曆丁亥。公以造山萬戶兼鹿堡屯田。蕃胡見屯田秋熟卒其衆來圍木柵。縱兵大掠、公登鎭北三里許高峯以禦之。分伏奇兵於賊路。日暮邀其歸。放砲鳴鼓擊。殺傷甚多。賊太懾。更不敢近。後人名其峯曰勝戰臺。宣廟壬辰。倭軍大擧。蕩我境。乘輿播越。宗社陷沒。公首起討賊。一破於唐浦。再破於閑山。三破鳴梁。公雖卒以身殉。而賊勢挫衂不復振。我東之有今日實公之力也。公忠誠貫日月。功烈鉛彝鼎。蕞爾一片之臺。不足爲公之重輕。而公之出奇殲賊。已自小官始。且朝廷之知公用公。終樹不世之勳者。實權輿於此。有不可湮沒。公之五代孫觀祥。今爲關此節度使。亟治石。千里走書丐余記其陰。嗚呼殆古所謂水不忍廢地不忍荒者歟。

壬午月日建之

嘉義大夫咸鏡道觀察使趙明鼎

記中所謂鹿堡の如き今や露國の境に編入せられ、露兵の徘徊するを見る、舜臣地下の魂知るあらばそれ何とか言はむ。

造山堡の西三里渺茫たる原野の中に德王の寢陵あり。絕えて人の吊するものなく、只群牛の荒草を嚙むあるのみ。

慶興は露國と豆滿江を隔つるの要樞とす。曾て府使住み、今郡守あり、然れども寥々たる百餘戶の民家散在するに過ぎず。

豆滿江の流たる曾て諸家の地誌に由て浩蕩たる大河なりと想ひしに、何ぞ圖らむ低淺くして小舟だも通ぜず、現今の所全然交通の利便なきを認む。

腰折數首御笑草までに供し候

鯨躍る波は山より高くして北斗のひかり低うきらめく

故郷は今かさくらむさくら花高麗の山路は雪深けれど

遠山の雲の旗手を指さして虎狩せむといさむさつをら

仇の鑑追ひ來と見つる夢さめて月かげさむし元山の沖

舟遠く吹く風さむく波たかし鰊すなとる春のあけぼの

× × ×

是れ實に明治三十九年四月、豆滿江畔より東京國民新聞社に寄せたる予が書翰である。指折り數ふれば最早二十年。淸津には守備隊の外、內地人は居なかつた。雄基は勿論である。此の秋、一行中の大田銑太郎氏は同伴三人にて白頭山の絕頂に登つた。翌年の五月には一行中の五名は、穩城の對岸で馬賊の爲めに慘殺された。

然し予等は三十七八年遼東半島に從軍の身を其儘移して此の江岸の左右に奔走したのである。依然として戰爭氣分が心身に充滿して居た。何等の艱難、何等の困苦も更に感じなかつた。

昇平相繼ぐ二十年、今日繁華の天地より身を轉じて國境に臨む人の恐らくは夢想視し得ざる事であらう。況んや國境の地理を測量せんが爲に奔走したる吾人一行ある事を幾人か知つて居るであらう。

## ◈堀內柞蔭翁

平田久雄

秩父屋主人堀內氏は、文章夙に一家を成して居るが、その筆蹟も一寸變つて居る▲これは氏の伯父柞蔭先生から來たものであらう▲先生は、明治二十年頃歿した人だが秩父十六鄕の碩儒であり、詩人としても、書家としても、餘技の篆刻の方からも、一代に鳴つた人である▲堀內氏は、昔を語らない、けれど氏の家は、秩父鄕の大庄屋であり、代々家塾を開いて、子弟を養成したものである▲タダの前垂かけではない。

# 慶州紀行

山口銀行京城支店　田口耕平

月城を登る處、氷を貯へしと云ふ石室がある。此頃既にアーチ型建築を企てたる處文化に驚かされるものである。

○

更に西すれば半島最古の遺構と云はるゝ瞻星臺、金閼智が黄金の櫃の中に現はれた所謂鷄林の跡を見て、車は鮑石亭に入る。

○

亭は南山の西麓、溪流に側し、景哀王妃嬪と置酒歡樂に醉ひ、百濟の甄萱の難に罹りし哀史を止めて、今は曲水の址跡、鮑石行人の興をそゝつてゐる。

○

車は轍を回らして遠く東に走せ掛陵に入る。參道の左右文武石人當時の服裝の好參考を止め、雄渾の石獅巧を見せてゐる。墳の周圍の護石十二支神像、前面の手法頗る雅麗なるも、裏面のもの簡拙なるは、人情表裏千有餘年來一貫したるかと皮肉である。

○

北して佛國寺に至り、石窟庵に上る、道程凡里許、急峻にして汗して吐含山の一角に達し、足下に山岳疊々を距て、四里の彼方、日本海の白帆を見る、こゝに旭日昇天を眺むるを最壯絶とする由、下りて三四丁石窟庵に達す。

窟内九尺の釋迦如來石蓮坐上に跌坐し、莊重端嚴、自ら溫雅崇高の感湧く。更に壁畫をなせる諸菩薩、羅漢、諸天、仁王等面相の豐麗、褶襞の穩雅、實に渾一せる傑作、生あり、神あり躍動せる心持せらる。惜むらくは窟の重修セメント文化式なることである。

薄暮山を下り佛國寺旅館に泊る

○

翌くれば二十二日昧爽、佛國寺

# 京城雜筆

○

日頃銀行の飯を食つてゐるせいで、督促には馴れてゐる私も、受身に於ては甚だ膽力がない。處に乘じて石川君が溫良なる眞綿式催促には正宗の切味以上にたゞ〳〵ならざるを得ぬ。事實雜筆社から何か書けと云はれて以來、いつしか秋去り冬往き春も老いた。

況んや銀行團の慶州紀行について團長松原（鮮銀）さんに放たれた矢か、この催促の受身に弱い、剩へ不義理に積つた私に換はされて來たに於てをや。惜しむらくは慶州は俳文の領域であり、最後迄松原さんが同行せられなかつた點に餘韻嫋々のものあり、團長の責任としても、要するに同君が最も適任者である。直接矢を飜して見たが、要領よき模糊の霞に消え去る、石川君再訪督促依然急なり。こゝに臍を極め觀念して、撫文二重の重荷を下ろすのみ。

○

西岳で汽車を下り、自動車の客となる。三月二十一日と云へば、春まだ淺いのに、流石南鮮の空は駘蕩の氣が漂ふてゐる。

初め武烈王陵の前に車を止めた時、いよ〳〵慶州見物の第一歩だなと思ふ。總督府囑託の諸鹿氏が一行廿七名の案内として、慶州の地形から說明が初まる。琵琶修練の音吐朗々、加之慶州の虫と云はるゝ程此の地のことに詳しい。

○

東山西岳北嶺南野、然も山容軟にして水態裕々、此處に舊都の夢を結びて王城の輪奐と、諸寺の廣壯とを想像すれば、靑舟よし奈良の古都にも勝れて感ぜらる。金剛山と慶州とは、是非杖を曳く可き處なりとはげにもと思はる。

○

武烈王陵龜趺螭首、風雨千三百年鑿の跡苔にもむさであるはうれし。石窟庵の石佛、佛國寺の兩塔等と共に朝鮮風土の幸と聞く。

○

陳列館に至れば、勝れて心地よきものに奉德寺の梵鐘あり、新羅の土器、塼瓦、今尙顯然たる金の王冠、耳飾、指輪、帶金具、透彫玉虫羽入鎧、其他當時の文化を偲ぶよすがの數々驚かさるゝのみ。

○

芬皇寺の塔の入口左右の仁王像四隅獅子石像、雄渾の氣魄面白し車を進むれば、皇龍、四天王、望德諸趾、礎石に佛を偲ぶのみ。

○

月城と對して、文武王半島統一の大業成り、宮闕を修め、池を穿ち、山を築きしと云ふ名殘の雁鴨池あり。古は巫山十二峯に象り、池中の小島林泉の美を極めしと云ふも、今は畚の中に寂寥たる池を臨むのみである。

の音吐朗々、加之慶州の虫と云は　臨むのみである。　翌くれば二十二日昧爽、佛國寺

# 京城雜筆

を見る。白雲青雲兩梯、七寶蓮華の兩欄、紫霞安養の二門、全く奇巧、更に多寶釋迦の兩塔細緻均衡嘆感に堪えず、殿堂は再建のもの中の佛像も昨暮石佛に視慾を擅にしたる後には興を引かず。

○

朝餉を終え、再び自動車にて東萊に向ふ。道坦々の直線、山態水容、南に入るに從ひ內地氣分せらる。中途、通度寺を訪ふ、鮮內一の大寺境內廣壯、山間鬱蒼たる松樹の間、溪流瀑溪の音を立て、幽邃の處である。

○

更に蔚山城趾を攀ぢ、當時の勇圖を偲び、二時東萊に出づ。流石南の梅花、複郁たるに春心地して旅の疲も忘れ、溫泉に塵を洗ひ、釜山に出で夜八時再び汽車の客となる。

○

旅程二日三夜、此の行私が在鮮三年求めて得ざりしあるものを得て歡喜に充てり、あるものとは何ぞ、曰く朝鮮に對する憧憬乃至敬虔の心である。

○

餘白少し、豫想の如く似而非案內記に終る、個々漫談逸錄、藝術讃美の極致に至ては私の分に非ず

## 本町雜話

田川吉雄

古本屋の方では、文港堂の主人は、商賣が上手で、すつかり金をこしらへましたね▲昨今では、書畫や骨董をいぢるといふ餘裕ぶりです▲一寸目も利くといひます▲評判の宜いのは、くすりで、貴生堂さんです、萬事が親切です、店に這入つても非常に氣持が宜いでせう▲時々、日韓書房にのぞきます、いゝ店ですが、あの天井をモウ一尺高くしたら、更に繁昌疑ふ可からずと思ひます、私のやうなノッポはどうも頭がつかえるやうな氣がしまして▲いつ覗いても『ヤー』といつて、景氣のよさゝうなのは村木の齋藤氏▲あの愛嬌につられて、一寸寄らうといふ氣になる▲平田は相變らず千客萬來ですね、篠崎さんのビルヂングがあんな風に參りませうかね▲いつ行つても、お客でうづまつて居るのが大阪屋號、あれで世間見ほどの金が出來ぬとは、新本屋も、割につまりませんね▲丸一の御主人は大の佛教信心者です、明けても南無……暮れても南無……先づ感服すべき人の一人でせう▲江戸川ですが、毎日晝飯時に、三百人前平均の、うなどんを賣るといひます、豪勢なものではありませんか▲尤もうなぎは時々感心しませんね▲もつとおいしく、念入りにやつて貰ひたい▲とう〳〵食べ物のことになつた、ではこの邊で、よしませう。

## ◈三角關係記

平田久雄

鮮銀の松原さんが團長格で、各銀行の幹部約三十氏が、慶州行と洒落れのめした事、既報の如し▲そこで本社ではこの紀行を書くのは當然松原さんの責任であると思ひ『お願しますよ』と駄目を押すと『あゝよからう』……記者欣喜雀躍して、次の機會に『まだ出來ませんか』と訊くと『あれは、考へて見ると、田口さんが最適任者らしいよ、どうも』一寸、形勢がわやしくなる、三度目『まだですか』と話すと『さう〳〵田口さんに話しておいたよ、うんと催促し給へ』とう〳〵遁げられてしまつた▲この處、外交なか〳〵至妙▲不意に荷物をおッかぶせられた田口さんまことに氣の毒、矢の催促に『どうでも僕が書かなくちやならんかナア』嘆息三回、とう〳〵萬忙を排して、慶州紀行一篇となるすら〳〵と書いてあるけれど、それ迄の松原氏、記者、田口さん三角關係の暗鬪、仲々目まぐるし。

# 朝鮮の溫泉

總督府地質調査所　駒田亥久雄

## 儒城溫泉由來

京釜線の大田驛と云へば可なり大きい接續驛であるが此處から三里足らずの西方に二個所に溫泉湧出地がある。大田驛から遠い方が昨今迄は儒城溫泉と稱せられて居たものであつて、約十町驛に近い方が一昨年に出來上つた新儒城溫泉である。

東國輿地勝覽によれば儒城は元公州牧の屬縣であつて溫泉としては左の記載がある。

在儒城縣東三里。我太祖卜宅于鷄龍山。太宗講武于任實之時。浴于此。

太祖の離宮を造營したと云ふ鷄龍山は忠淸南道の景勝であつて古來騷客の嘆賞措かざる所、山容秀越、春秋共に遊覧に適するから杖を曳く者の絶えた事がない。附近山中に甲寺、新元寺、東鷄寺等の名刹がある。

太宗は李朝第三世であつて紀元二〇六一年より同二〇七九年の間王位に在つた方であつて任實郡地方に於げる大演習に際して浴せられたと云ふからには今より五百餘年前に既に浴場の設けがあつたものと思はれる。但し其の個所が現今の舊儒城の方か新儒城の方かは不明であるが何れにしても其の後度重ねて洪水に見舞はれ全く顧みられなかつたが大正三年に大田の有志で會社を創設して試錐を行ひ溫泉場を經營したのが即ち舊儒城溫泉の地であつて是れが溫泉場として最近に於ける復興の先鞭である。次は前述の如く此の溫泉場の東方約十町の地で古き柳の木の根に溫泉露出の存在して居たのを便りに大邱の人藤繩文順氏が數十本の試錐を斷行して漸く十二年秋に出來上つた溫泉場であつてこれが即ち新儒城溫泉である。

口碑の傳ふる所によれば太宗の入浴した個處は新儒城溫泉區域に屬する前記柳の古木附近の湧出溫泉との事であるが其の眞否は不明である。但し新儒城溫泉で數種の鑛泉に付ラヂウムエマナチオンの檢定を試みた結果は此の柳古木附近の湧出溫泉が一頭地を拔いて鑛泉一キログラム中に約五十マツヘのエマナチオン瓦斯を含有し今日迄前揭各地の溫泉で試みた約四十回の檢定試驗中にても勿論首位にある。依つて私が儒城藥泉と命名した位である。是れが恐らくは古來からの所謂儒城藥水とせられて居たものかも知れない。

## 溫陽溫泉由來

京釜線天安驛から京南鐵道により僅か三十分を走れば溫陽溫泉がある。儒城溫泉と同じく平野の中に湧出する溫泉であつて四近の風物は何等眼を樂ましむるものがない。

東國輿地勝覽中には左の記事がある。

世宗二十四年。幸溫泉。改今名溫陽郡。云々

即ち溫泉所在地が此の時から溫陽郡となつた事は是れで分明する今は牙山郡の管轄内に置かれてある。

泉に關しては、

在郡西七里。療病最効。我太祖世宗世祖嘗巡幸留浴。有御室。

是れによりて考ふれば今より既に五百數十年前に溫泉場としての設備ありて李王も屢巡幸して沐浴し且病痾を醫する効驗も顯なりしやに思はれる。

現存せる朝鮮浴場は李朝太祖の建築に係りて故大院君の重修したるものと云はれて居る。今は溫陽溫泉株式會社の經營に移り源泉も試錐によりて獲られて居るが何分にも量も溫度も潤澤と云へぬ樣である。

溫陽溫泉は儒城溫泉と共に何と云つても溫泉としては中鮮の代表者である。其の存在個所は景色の變化に乏しき田圃の中であつて附近にも探勝個處は餘りない樣であるが京城から二、三時間の汽車行程で然も本線から三里内外を隔つて交通至便と云ふ點が强味である

尙は鳥致院驛から淸州を過ぎ淸安に至る忠北線の便を借りて更に槐山經由で約十八里、忠州經由で二十里も行けば彼の有名な水安堡溫泉がある。朝鮮縱貫一等道路に沿ふては居るが現在では尙行くに不便なるのみならず溫泉量も溫度も旅舍の設備も十分でなく又景色も何等見る可きものがない。今日の所地方民のみの利用する溫泉に過ぎない樣である。

# 京城雜筆

## 私の迷信

朝鮮新聞社　野崎眞三

◇

迷信と人は笑つても私には力強い信仰であり或る場合は私の生活全般を支配する以上、私は私の迷信を尊重して居る。

◇

天罰……私は天罰を惧れてゐる、因果應報を無條件に信ずる譯ではないが、私が不當利得をした場合とか思はぬ入金のあつた場合には屹度財布を遺失したり怪我をしたり器物を毀損したりする、惡因惡果は偶然かも知れないが正しく現はれて來るので、私は之を天罰として惧れ、不當利得の時は惡錢身に附かぬと觀念して、何かに費消し盡す事にしてゐる。斯うすれば惡因に對する所謂惡果を防ぎ得るものである。

◇

惡の引力……妙な言葉であるが惡、不幸、痛苦等には引力がある朱に交はれば赤くなるとか孟母三遷等の俚諺や友引等の言葉は、這般の消息を說明するものである。惡は眞黑い磁石のやうなもので、近寄るものは誰でも惹き付けずには措かない、私は惡の引力を痛切に感じて居るので、私は環境を熟視して惡の引力に感じない事に努めて居る。

◇

敬虔さ……悉べての宗教を肯定し得ず搗てゝ瞬間刹那に生きてゐる私でありながら、私は神社佛閣を訪ふて偶像の前に祈るのが大好である。此對象は偶像でなくもよい、墓地でも或は山上、海岸でもよいのである、そして何を祈るのか自分にも知れない、祈る形式は何でもよいたゞ敬虔な心をヂツと續けてゐると快いのだ、理性からすれば莫迦々々しい事ではあるが私の迷信から私は時に熱烈なる信仰者の如く思はれる事もあるが、私には此敬虔さも繪畫、彫刻等偉大な藝術に接する歡喜と略ぼ同樣な快さである。

◇

病魔……私は三人の子供を持つてゐる、處が三人共に病氣しない幾月かゞ續くと、私も妻も、病人がなくて結構だと晩餐後の話題に語り合ふ、すると屹度一兩日中には、三男が消化不良でヒキツケたりする。此苦がい體驗から私の家庭では、決して此頃病人がないなぞ安心らしい言葉を謹しむ習慣になつてゐる。少年時代に繪の本で見た病魔は、宇宙を驅廻つて人間の身心の隙を窺つてゐるに違ひない。風邪を引くと云ふのも病魔を招ぐ結果だと思ふ、身心に隙を造らず病魔を招かなければ病氣には罹らぬものだ。

◇

第一印象……或は直覺、第六感と云ふ種類を批判の基調とする事も迷信かも知れない。デモ私は其職務にも生活にも、此迷信を押通すが今日まで略ぼ正鵠を得てゐる人間にも物品にも其れを包ぬ雰圍氣がある、ヒヨツと觀た瞬間には公平に且正確に感受されるものである、私は之を迷信でないと信じてゐる。

◇

朝の大便……一番滑稽な迷信は私の朝の大便である。朝起きるとスグ便所に行き朝飯後にスグ亦便所に行く、此朝の二回の便通が快く終了する日は私の一日の生活は祝福される、處が不良な日には必ず不幸か痛苦が來る、私は朝の二回の大便で一日の運命を占ふ譯である。然し一面では便通の良好は健康の表徵であり、健康なれば其一日が面白可笑しく暮らせる譯ではあるが、そうした合理的推理なしに私には朝の二回の便所通が大切である。

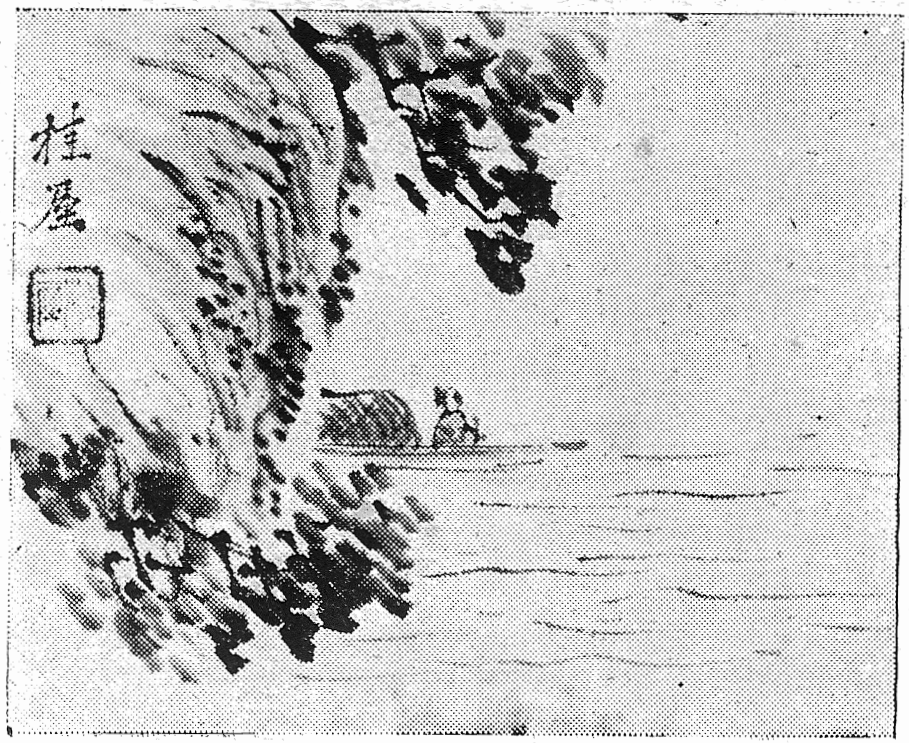
◇

文化が進展し生活が複雜多岐になり、科學が進步すればする程、人間生活は迷信が多くなるのではなからうか。（一四、四、七）

## ◈叩けば鳴る

平田久雄

總督府醫院の志賀院長曰く、原稿なら松井博士と廣田博士に賴みたまへ、アノふたりは名人の作つた鐘のやうなものだ、叩けばいくらでも音が出ると▲廣田博士は、俳壇の名士だ、その俳號は弘く玄人の間に行はれて居る▲松井博士は本號に『日本民族』を書いて下すつた▲該博な知識の片鱗を窺ふことが出來る▲兩博士とも、今後本誌を御後援下さる筈である。




殖產銀行　櫻井小一氏筆

C.111.1

# 洋行縮尻話

京畿道廳　馬野精一

昨年の夏、巴里から瑞西の『ベルン』に向つて出發する時の出來事でありました。タキシーで停車場に駈けつけて見まするとまだ發車時刻には二時間計りの餘裕がありました。荷物はスートケース一個と、小さな手提鞄丈でありましたから、其のまゝ列車に持ち込んでも一向差閊は無かつたのでありましたが、發車時間まで手許に置くのも邪間になりますし、旁々赤帽の謂ふがまゝに荷物係に預ける事に致しました。素より私には佛蘭西語が分りませぬ。從つて赤帽の話などは珍糞漢要領を得なかつた事は今更申し上げるまでもないのであります。併し、そこは元來が横著に生れついて居りまする爲に、案外平氣なもので、萬事は赤帽の爲すがまゝに、切符と引き換へにスートケースを荷物係に預け、發車時間まで驛の附近をブラついてから、プイと列車に飛び乘つたものであります。旅券や信用狀を入れてある手提鞄丈は命から二番目の大切なものでありますから、肩身離さず所持して居つた事は申すまでも無い事であります。

ところが、汽車が國境の或る停車場に著きますと、例に依つて稅關吏の檢査が始まりました。汽車に預けた手荷物は一應荷物車から驛の構内の檢査所に持ち出し、荷主立會の下に檢査をする事に爲つて居りますので、私も檢査所まで行つて見まするとなにうした事か曩に預けて置いた筈のスートケースが見當りませぬ。兎角する内發車時刻が迫りましたので、已むを得ず汽車に飛び乘つたのは好いが何うにも氣がゝりでなりませぬので、隣席の瑞西人が英語を話すのを幸に、荷物の切符を見せて調べて貰ひますと、豈圖らんや夫れは一時預けの預り證文ではありませぬか、其の時のキマリの惡サ、全く赤面の外は無かつたのであります。

サレバと謂つて、今更荷物を取りに再び巴里まで引き返す譯にも參りませぬ、不自由を忍びつゝも、兎に角旅券と信用狀さへあれば生命丈は大丈夫と高を括つてとう〳〵瑞西と伊太利は著の身著の儘でブッ通す事に決心したのでありますが二週間目に巴里に歸つて、切符と引き換に埃まみれの手荷物を受け取つた時は、夫れでもマア〳〵泥棒に盜まれたよりはマシだつたと謂ふ負け惜みの諦めも手傳つて、ホット一と息ついたのは好いと致しましても、何んとなく一種の淡い哀愁を感じない譯には參りませぬでした。

× × ×

まだ外にも有るだらうと仰せのお方も御座いませうが、私の赤毛布は後にも先にもたつた是れぎりです、何うか此の上御追求下さらぬ樣にお願ひ致します。

# 汽車の公德

鐵道局旅客係主任　佐藤作郎

◇

社會の事象何ものにも公德がなければならない。公德としかつめらしい言葉を用ゐぬまでも、公德問題は井戸端會議にも日々に上つて居る。水道の共用栓流し口に頑張つて長居する女房は、後口の水汲女房に心遣りのない女だ。流し口で汚物の洗濯が、後から來る米淅ぎに迷惑を及ぼす。要するに公德とは、他樣に迷惑をかけぬ思遣りの心だ。新しい道德でも哲學でもない。世間一般誰人にも普遍的に行はれなければならない、共同生活上の自然の法則だ。怎麼分り切つた又つまらない問題を眞面目に考へて見なければならないとは實際につまらない事だ。夫れでも日々私達は痛切に此の問題に付き考へさせられて居る。『降りる方がすんでから乘つて下さい』『人は腰掛に、荷物は棚に』『お互に車內を綺麗にいたしませう』何んと莫迦らしい程分り切つた文句ではないか。孔子も基督も釋迦もソクラテスも、大正の年代に怎うした揭示が公衆に向つて示されやうとは思はなかつたであらう。

◇

句聖芭蕉の行脚の掟に、衣類器財相應にすべし、過ぎたるはよからず、足らざるは惡し。

大淀三千風の旅の掟に、色欲、身欲、名聞欲を離るべきこと、驕慢心愼むべきこと。

自分の身分を知るものが少い旅の空では、兎角自尊心を傷けまいとする心と成るべく善く見せやうとする虛飾とで、己れを飾り他を排して己れを現はさうとするのが旅客の通弊だ。胡麻の蠅と言ふ旅行の發達をはばむ障害が蔓延して居た昔は、金滿家も故意に文なし旅人を粧うて居た。所定の料金さへ拂へば、身分の高下を問はず展望車に納り又土地一流の旅館に自動車で乘込み得る現代は、金の無い者も有る者の贅澤を眞似るやうになつて居る。芭蕉や三千風が墓の下から嘸ぞ嘆いて居るだらう。しかし自己の贅澤はお勝手次第だ怎うした人に限り傲然と、入用もない大鞄を城壘として、傍らの座席を侵略し、相語り相慰め、親しく樂しかるべき隣客を仇敵視して居る。

◇

旅客を普通旅客と趣味旅客とに大別するのは私達の見方だ。然しどの旅客でも同し事だ、停車場の玄關を一歩內に這入ると、一種あわただし氣分を呼び起すらしい。別にそう急ぐ必要もない切符を求める事に付き先を爭ふ。改札口で押合つて一刻も早くプラットホームに出やうとする。汽車の狹いデッキで人を推し除けて進まうと揉合ふ。群集心理と云ふは恐しいもので、二三の人が無理に先きを爭ふと、夫れが一般に波及する。人情の冷たさを見るには、汽車の乘降に最もよく表はれて居る觀がある。陽關中が客舍休悲柳色春、東西南北一般春、若知四海皆兄弟、何處相逢非故人、と云つた、さうした悠暢な氣分で旅行する世が到來せぬ限り、日本人の文明はバーバリアンで歐米人から取扱はれるだらう。

◇

忙しいそして紛擾の絕えない世の中だ、同情のない訪問客は休養日さへ滿足に與へて呉れない。家庭に居ては心を養ふ時がない。唯た一つの休養の途は旅である。目的地には美しい優さしい自然がいつでも待つて居て呉れる。半日閑があれば半日の旅一日暇あれば一日旅、郊外散歩の小旅行も世界漫遊の大旅行も、共に人の心神を養ふに足るものだ。されば歐米人の間には此意味の旅が汎く流行して居る。都會と云ふ都會の停車場は常に此種の旅客で非常な賑ひを呈して居る。然し彼等の間には、驛員の制止もなく又別段世話方もないのに整然たる秩序と節制とがある。一人の先を爭うとする無理の人が無い。彼等は旅行を最も樂しい愉快のものと信じて居る。彼等の胸裡には目的地の美しい幻影が描かれて居る。其幻影の破壞される事を彼等は最も嫌つて居る。自分のものを破壞されまいと大切にする事は一面他人の幻影を破壞せぬ事である。即ち他人樣に迷惑をかけぬと云ふ思遣り心である。

◇

歐米の停車場で『降りる方がすんでからお乘り下さい』などの種類の揭示が見當つたことがない。

# 京城雜筆

## 平福百穂氏

### ―今年の鮮展審査員―

加藤松林

いつの間にか鮮展も四回を數へろやうになりました。それに今年は審査員にその人を得て、私たちの樂しみも倍加されたわけであります。

いつも繰り返へし言はれるとほり、まだ發生の道程にある鮮展の審査員としては、人格、識見、手腕共に優れた人であることは勿論なほその上に、願はくば、すべて芽生へに對して深い同情を持つ人が望ましいと思ふのであります。

鮮展に限らず、すべてある文化の發達成長には常に洞察ある先輩のよき導き、啓發を必要だと考へます。然し、悲しいことに今迄の鮮展にはかうしたよき指導者を得ず、また、出品者の中にも見るべき素質なく、發生匆々にして早くも倦怠の感じがあつたのでありました。

今度、審査員にその人を得たが爲め、忽ちにして鮮展の内容迄もよくなると考へることは早計でありますが、少なくとも、今年こそは何物か期待さるべきものあるを確信いたします。有形か無形か私たちにとつて必らずや深く味ふべきことがあるに違ひない。

平福百穂氏は人も知るとほり故平福穣庵氏の子息であつて、往年の文展に於て七面鳥、豫讓を出品し、一躍社會的に高名になつた人でありますが、その人格に於て、また藝術的な深さに於て現日本畫壇の第一人者であるばかりでなく大抵の作家はその作風が何か一方に偏してゐるものでありますが、氏に於ては四條、南畫、古土佐、洋畫の何れもが實によく融合されて、完全なるひとつの世界を切りひらいたところ、所謂、ゆくとして可ならざるなき大作家であると思ひます。

現在の鮮展は、氏に見て頂くべく、あまりに貧しいことを淋しく考へます。

とにかく

平福百穂氏は畏ろしい人であります。ひとつの畫面をとほして作者の心を讀み得る人であります。私たちの日常生活に於ける一張一緩が、畫面をとほして露骨に氏の前に曝け出されるであらうと考へます。だから畏ろしい。

然し、私としてはかうした人にうんと叱られてみたい氣がします自分の全部が否定されたとしても猶且つしみじみとした難有さが感じられるであらうと思ひます。

今年こそは總ての出品者が赤裸々になつて努力すべきであります

終りに、氏は歌人としても現代の名家です、私が愛誦する二三

富士山の歌

嚴根搖り岩屋岩戸も飛びぬべく
蒼雲どよもす風のかしこさ

山の宿

夕未だ合歡咲く宿にあゆみつき
ふるき草鞋をぬぎ棄てにけり

身邊雜詠

日あしうとき冬木の庭にくれな
ゐの山茶花咲て散りにけるかも

## ◈江湖聞見錄

平田久雄

淺川伯敎君といへば、鮮展彫刻部の中心人物で、毎年變つた、特色のある作品を示して居る人である▲この人が最も趣味を有つて居るのは、朝鮮陶瓷器の研究で、それはもう十數年來やつて居るが、その造詣の深いことは、同好の悉く推服する處である▲處で、あまり金持でもない淺川君が、萬事を抛つて、陶瓷器研究をやつて居るに就ては、そこに、隱然たる保護者がなくてはならぬ▲それは東京の實業家藤原銀次郎氏で、氏は深く淺川君の熱意に共感し、安んじて研究の出來る丈の資を、言ふがまゝに氏に貰いで居るんだとは、聞いただけでも氣持の良い話ではないか▲鮮展の洋畫部で、いつも首席を爭つて居るのは、第二高普の先生山田新一君と、蓬萊町の質屋のムスコさん戸田運雄君である▲共に東京美術學校出身▲そして山田君も、戸田君も、洋樂に趣味があり、間かな隙かなマンドリンやギターをいぢり廻して居るとは、さすがは新らしい▲京城にも美術雜誌『玄黃』が生まれた。

# 東支鐵道南線

奉天　廣江澤次郎

東支鐵道ハルビン行の列車に乘る萬國寢臺會社の客車貳等室に納まる、結構善美を極む。五十格好のロスの好々爺が、ボーイ役を勤めて吳れる。之れが赤派の手に歸したる東鐵、喧嘩長官と雷名を轟かすイワノフ理事長の幕下とは思へぬ溫厚振り、汽車の時間表を見る

長春　二十時二十分　到
同　廿二時五十五分開
哈爾賓　八時十五分　到

支那の汽車時刻表で、折々私共は其の二十四時間通算制の新らしさに面喰ふ。之を和譯？すれば長春驛著午後八時二十分、同驛發午後十時五十五分、哈爾賓著午前八時十五分。五十年後の社會は私共午前午後制の慣用者を時代遲れの迂濶者と笑ふであらうが、今の處二十四時間通算制は新らし過ぎて少々面喰ふ。

遺がに東支鐵道だ、乘客も露西亞人が大部分である、パーザルスト（どうぞ）スパシーボ（有難ふ）ハラショー（結構です）モーズナ（差支ありません）等、露語が耳新らしく聞へ、露西亞氣分が漂ひ出す。

晝間の疲れでグッスリ寢やうとしたが仲々寢むれない、此東支鐵道南線即ち長春哈爾賓間白五十三哩を、露西亞側が逆用し、大連長春間四百三十八哩の滿鐵幹線を脅かすので、日本がどれ丈け不利益を蒙るか知れない。東三省の寶庫——豐饒地帶の北滿洲に產する十億の物資は、此南線の爲め遮斷され勝だ。滿鐵も隨分犧牲を拂ひ、凡百の手段方法を講じて居るが、不徹底だ。喧嘩長官ゴ來臨以來益々甚だしい、併し待てば海路の日よりである、愈々滿鐵は洮南より齊々哈爾及び昂々溪迄の敷設權を獲たやうであるから、是れで安達

## 京城雜筆

◇

旅行を一向苦痛と心得ぬ私は、天津、北京、漢口、上海、哈爾賓邊へ出懸けるにも、別段臆劫とも考へぬが、旅行免狀の必要な方面は少々面倒だ。昨年十一月十四日附奉天日本總領事館で、露領西比利亞と佛領印度支那へ商業視察の旅行券は下附された。

北京で芳澤公使と、カラハン大使の交渉は根氣競べの好標本、一進一退、何時結末が着くかと案ぜられたが一月二十一日急進轉、七ヶ年目に日露國交は回復した。豫て某商談取纏めに浦潮へ出馬を慫慂されて居つた私は、幸先きよしと愈々決心の臍を固め、一月二十七日奉天を出發した、最初は三週間位で一切決定し、金塊の二三十も提げ、ドンナもんじやい腕前はと許りに、隣近所や友人の迷惑もお構なく、鼻高々と凱旋將軍氣取で騎ろうと太い量見の豫定であつたが、ドッコイさうは問屋が卸さぬ、難行苦行の六十有餘日をハルビンと浦潮で暮し、苦心慘憺、商談取纏め今や之に花咲き實を結ばせんと懸命の努力、忙中閑を偸み五月號より旅中雜感を思ひ出づるまゝに、筆走らすことゝする。

◇

私共の如き旅行常客には、沿線の風光も別段何等感興を引かぬ、只新臺子で日支國旗が交叉され、仲よく翩翻たるが嬉しかつた、日本人の家かとも思つたが、赤紙に金字で『開市大吉』とか『萬事亨通』とか例の緣喜よき文字が支關番して居るのを見れば、支那人らしい、私は支那製の日章旗を見る都度、洵に物足りなく思ひ、お願したいのは日の丸をモウ少し大きくして貰いたい事だ、故意か偶然か、支那製の日章旗は、殆んど各地共大きな白地の眞中にチョンボリと日の丸があるが、不釣合にして見すぼらしいこと夥だしい。敬愛する中華民國の大人よ、希くば日章旗の赤丸をモウ少し大きく染出して下さい。

昌圖を過ぐ、構內に奇麗に刈り込まれた雅致ある松を見た、矢張り日本人は美術の國、歌の島人だ驛長さんの風懷も偲ばれ嬉しく感じた。

右方遙か、日露の戰役に敵地深く潛行し、偵察任務を勇敢に決行した忠勇なる田村騎兵中尉最後の靈地に默禱を捧げ、冥福を祈つた

汽車は長春驛に一分の相違もなく、五時間と三十分で奉天長春間百八十九哩を痛快に突破し、晚の九時到著した、之れから先がロスキーの勢力範圍かと思へば、若干精神の緊張を感ず。時計を廿六分進ます。

◇

プラットホームに待構へて居る

只新臺子で日支國旗が交叉され、プラットホームに待構へて居る齊々哈爾及び昂々溪迄の敗設權を

# 京城雜筆

## 親に孝行

中央電話局長　上田勇

『親に孝行』をせねばならぬと云ふことは、當然すぎる程當然のことで、小學校の一年生でも先生から『親に對してはどうすればよろしいですか』と問はれたら、紅葉のやうな手を擧げて一齊に『孝行をせねばなりません』と云ふであらうこれ程普遍的に、これ程少年の時代から頭の中に刻み込まれた處のものが、さて成人してほんとうに親孝行をして人からも認められ已れも許し得るものが果して幾何あらうか。

單に知つて居ること丈けで、又單に聲明すること丈けで世の中に通するものなら、これらの人々は皆親孝行者であらねばならぬ。

先生から習つた事を其儘答へるのと、實行とを全然別物と考へる處に此樣な矛盾が起るのではあるまいか

凡そ何事に就てもやるべき方針や、實行すべき主義を聲明する場合は非常に多い、然し唯聲明丈けならば是又右の親孝行と同じ類のものとなるのでなからうか

此の間電話局で三百の從業員から各自の純眞なる電話に對する所謂『如何にすべきか』と云ふモットーを募集した、勤續僅か半歲に滿たぬ若い女子事務員が『他人と思ふな加入者を』と云ふ誠に電話局の大理想とも云ふべき、立派な、意味の深い金言を編み出した、これでとにかく『親に對するには如何にすべきか』『孝行をせねばなりません』と云ふ處迄は漕ぎつけたものと考へることが出來やうしかもこれは先生に敎はつた所をそのまゝ答へたのではなく敎はらずに自分から考へ出した處に大切な强味があると思はねばならぬ。

當選標語發表の當日多數の從業員の集りの前で、この金言を作つた當選者は非常なる感激に充ちた口調で『若し私が將來この標語に反する樣な行動を採つた事があつたら遠慮なく會釋なく皆さんから御叱りを蒙りたい』と云ふ意味の感想を涙の中に述べた、他の列席者の中にも貰ひ泣きをした者も少なくなかつた。

此の場面を見て私は非常なる力强い或者を摑んだ樣な氣がした。

護たやうであるから、是れで安達を中心とする優良特產物は滿鐵に引着くる事が出來よう。それにしても此南線百五十三哩が稍だ。樺太も半分より頂戴仕れずなどと勝手な考が活動し出すと、若干昂奮して益々寢られない、寢やうと藻掻けば藻掻く程眼は冴えて寢られない。

冷頭一番、心氣一轉、深呼吸二つ三つ遣り漸く華胥の仙鄕に遊ぶ

翌朝同乘客が呼ぶハルピン見ゆとの歡聲に、眼をコスリ乍ら窓外を眺むれば、白雪皚々たる北滿曠野の遙か彼方に、ハルピン市街が繪の樣にボンヤリと浮き出して居た。

## ◈凡上雜談錄

平田久雄

公天寺尾竹三郎氏、隨分忙しい人だが、本誌から執筆を賴むと、大抵の場合『ムゝ宜からう』氣持よく承諾してくれる▲處で、この間小野經濟日報氏が遣つて來て『時に寺尾さんを訪問したかね』『イヤまだしないんだよ』――之は町人氏の答――『すると、マダ一度も逢はないんだね』『うゝ、まアさういふ譯だ』すると小野氏呆れた顏して『驚いたね、どうしてそんなに訪問嫌いなんだらう、譯が分らないね』茲に至つて町人氏頭を搔くこと無慮數十回▲勸業信託の藤尾さん、小鳥を愛養し、家族一同でそれを樂んで居られる『第一、早起する、心をやわらげられる、物のあはれを知ることが出來る、君も一つ遣つたらどうか』そりや實に熱心なもの▲鐵道協會の岩本主事、朝鮮古代史七百頁を、約三週間で脫稿、近々市に出づ。

# 京城雜筆

## 大庭柯公を想ふ

東京自由討究社　細井肇

### 大庭の小父さんと山地の小母さん

うちの子供達の間で、いつも噂に上るのは、『大庭の小父さん』と『山地の小母さん』である。今から四五年前、三女治子が五六歳の頃だつたと思ふ、來訪された大庭君が、玄關に上つて外套を脱いでゐると、大庭の小父さんと聞いて、子供達は、一齊に歡聲を揚げて玄關へ驅け出して行つた。治子が、『小父ちゃん』と呼び懸けながらピョンと飛び上つた。通さんぼの姿勢そのまゝ、よろこびの兩手をひろげてやつたのであるが、すると、大庭君も治子のした通りすぐに兩手を擴げて『お孃ッちゃん』と氣輕に飛び上つて見せた。そばで見てゐた治子よりは二歳年上の次女の例子も治子と一緒に笑ひを爆發さした、治子はこの好きな小父さんに、しがみ附くやうにもつれ懸り、手を曳かれて室へ通つた。其時の光景が、今でも歷々と眼にうつる。山地白雨君は、併合前から朝鮮に渡つて、京城郵便局の電報の受附掛長でゐたが、後ち歸京して白雨詩社を起し、招聘されて東京朝日新聞社に入社せんとした矢先、心臟痲痺で逝いた薄命な詩人であつた。私にたゞ二人の心からの友があつた。一人は石橋獨嘯君、これも今は亡い、他の一人は、渾然玉の如き純眞な性格の持ち主であつた白雨君其の人である。其の未亡人いし子さんが、今では芝白金臺町に資生堂藥舗を營んでゐる、長男の鮮さんは數年前に亡くなつたが、令孃の美穗子さんは、もう十五歳になり、白雨君をそのまゝな奇麗なおもざし、父君に似て、英語が學級の中で一番すぐれており、卒業後は貸費生で洋行さしてもらへるだらうとのことである、美穗子さんと例子治子が大の仲能しであるからでもあるが、この『山地の小母さん』が『大庭の小父さん』と同じやうに子供達の憧憬の極致である。時には山地の小母さんの子になりたいなどゝ云ひ出すこともある。若し此の小母さんの聲が玄關に聞こえやうものなら、子供達は、飛び出して行つてブラ下る、一時に家の中が明るくなる。昨今では土曜日曜に、必ず『山地の小母さんとこへ行つてもいゝでせう』をせがむ大庭の小父さんと山地の小母さんは、我家の子供達に取つて譬へやうなき親しみである。其の大庭の小父さんの痛々しい寫眞が東京日日へ出た時、『大庭の小父さんは何の悪いことをしたんです。』小さな姉妹二人が、眞劍にまん丸な眼を睜つて問ひ詰めるのであつた。『悪い事をしないのにロシアの人はナゼそんな事をするんでせう』疑團がどうしても繹けぬらしく、今でも突然それを云ひ出しては、繰返しくする。私は、其の都度嚙んで含めるやういろくのお話をした。フール、イワンのお話もモウこれで二三度も、說き方を變へたり譬喩を更へたりして話して聞かせたのであるが、まだ、まん丸な四ッの瞳は張り切つてゐる。五六歳の少女にこうまで親しみ懷かれた、好きな『小父さん』を、ホントウに『ロシアの人はナゼそんなことをするんでせう。』——

### 正面攻擊の成功

大庭君は番茶の茶殼を嫌つた、若しそれが茶碗に浮いてゐるとフーフー吹いては喫む癖があつた。酒はあまり深くはやらなかつた、ビール位で淺い醉を買ふに過ぎなかつた。併しイヤ味のない、快濶な坐談で酒の坐を賑やかなものにした。垢拔けのした應酬で、酌に出た妓にも好かれた。朝日の連盟退社後、私が森ヶ崎の『富士川』で閥族罪惡史を著述してゐる時だつた、これも書きものゝ爲め近所の湯宿に來てゐた堺利彦君と期せずして三人が落ち合ひ、一日富士川の離れで汲み交はした。若い妓が、『アラ、貴郎はうしろや横から見てると隨分おぢいさんのやうだけれど、正面に見ると可愛い顏してらッしやるのね。』大庭君平手でテンと額を叩き『イヤ、之はいゝことを聞いた、諾矣』とばかり妓の坐を動く毎に、大庭君も相應じて機敏に方向を轉換し、時には卓に背いて我れくには遺憾なくそのおぢいさんに見へる後頭部を暴露して置きながら、眼鏡の下の細い眼に悅をたゝえて、頗る面積の廣大なる前額部を第一線に、しきりと眞ッ正面攻擊を最後までつゞけてゐたが、トウくに凱旋した

だ、少いけれど、と云つて大庭君が『袋』をポケットへ入れてくれた。禿山落木の半島へ志す敗殘の洞然、潔き最後を遂げたであらうことを想望しつゝ、書し來たつてあゝ我れ弱し、遂に涙なきこと能

きりと眞ッ正面攻撃を最後までつゞけてゐたが、トウ〳〵凱旋した

禿山落木の半島へ

私が、朝鮮會館の設立を企てゝ零敗に了つた時、若し會館が設立されたらば、附帶事業の一として實現を豫期してゐた、難解な朝鮮古書の言文一致譯、獨力でそれを試みやうと思立ち、朝鮮に渡る事になつた。併し、朝鮮會館の創立費に巨額の資金を失ひ、身に餘る債務を負ひ、典物し得る一切を典物し去つたアトだつたので、電車賃にも窮してゐた。兩袖秋風、眞に孤懷悽涼の感に勝えなかつた。こうした時、何の隔てもなく心持よく相談のできるのは御同樣裕かでない、大庭君の所謂貨幣タラン〳〵黨の一人たる其の大庭君であつた。愈よ夜汽車で出發といふ日メーゾン鴻の巣で、大庭君と村田懋麿君から訣別にとて夕食の饗應を受けた。今、社（讀賣新聞）から二人で最大限を前借して來たんだ、少いけれど、と云つて大庭君が『袋』をポケットへ入れてくれた。禿山落木の半島へ志す敗殘の身は兩君と別かれて東京驛までの横丁の夕闇を、堰いても〳〵涙は止まらなかつた。

白樺の林を背に

朝日の連盟退社當時、大庭君も私も、同じ靑山の近所に住んでゐた關係で、眞夜中の二時頃に來てもらつたりして、二人で先づ相談もし行動もした。洒脫な半面に威武も屈する能はず富貴も淫る能はざる、熱烈、火の如き氣節骨力を藏してゐることを其時ハッキリ知ることができた。この正反對に近い性格は、表裏經緯して、アキラメも度胸もあつた。頸の坐に直つた時、決して動じない大丈夫兒の眞骨頭を具へてゐたと同時に未練らしい女らしい心は露更無かつたであらうと思はれる。白樺の林を背に、大庭君よ、君は恐らく豁然大悟『斯くても逝くか』――襟懷洞然、潔き最後を遂げたであらうことを想望しつゝ、書し來たつてあゝ我れ弱し、遂に涙なきこと能はぬ。

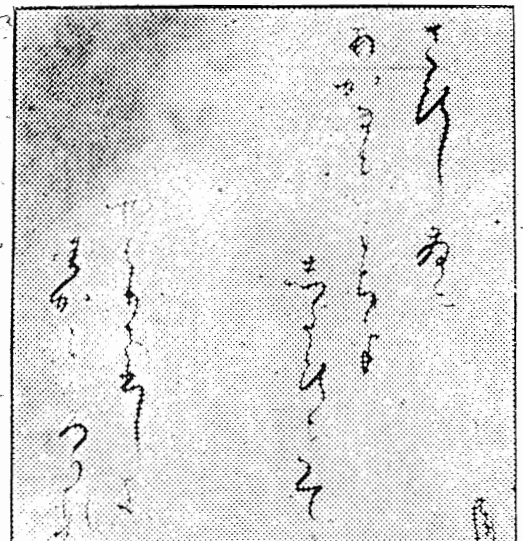
月の家と幸四郎

大庭君は、ロシアに入る時朝鮮を經由した。忍びの旅であつた爲め、驛頭に迎えたのは、讀賣新聞特派員の山副昇君と私と丈けだつた。記者團の歡迎宴も謝絶した。朝鮮ホテルへトランクを投げ込んで、直ぐ其足で我等三人は、俠な女將が、浪人を歡び迎えるところから、――今は無くなつたが――同人の間に『浪人窟』の別名で通つてゐた南山町の月の家に向つた正面攻撃が成功したか否かは、山副君のみ與り知る、私は遲く小山の上に孤立してゐる古市町の自宅に引取つたが、當時、大庭君は大層幸四郎が御氣に召し、例の前額運動を試みたやうだつた。翌朝古市町の自宅で、ばあやの拵らへてくれた至つて無味な味噌汁で、三人朝食を共にしたが、思へば終に永劫相見る能はざる最後の別かれであつた。

## ◈柯公氏全集

雜筆同人

朝鮮の讀書界に、『柯公全集』の購讀を推奬したい。既に第一卷の隨筆が刊行された。全集賣揚げの利益は遺族に提供することになつてゐる。豫約を申込んでおいて、解約したり代金を拂込まない人が百何十名とかあつて、本屋でない刊行會は、豫算に狂ひを生じて困つて居る。希望者は『東京麴町區下六番町二七柯公全集刊行會』へ御照會願ひたい。



# 帶の情趣

螺炎浪客　今村鞆

春淺き或日、拙者が浪宅へ訪問きの訪問客、其人は永樂町人と德野中老、要件の一として原稿の詰催促、且曰、軟かで硬く、長からず短からず、而も艶つぽい物をとの難題、考へた揚句、ドーニカ注文通りの物を仕立上げた。

『是れ造化の無盡藏……喝ッ』と貴、或大禪師が、美人の帶の括り目を、如意棒で直指しました……兎角女の帶には、御色氣が有ます、蓋し畢竟、夫れは曲線美の轉合點を被ふて、位置せる爲です、同じキレでも、ショールやベールには情味がありません。

ヲナラが不可思議の魅力愛嬌を有して、法皇の御惱を驅し、或は又高僧の說法を臺無にしたのも、詮ずれば、夫れが頭の天邊から出すに、愛情の要塞地帶から、發聲する爲めに外ならぬのと、同一原理の下に解釋されます、總て性を度外した人生の考察は空虛です。

日本の女裝に特徵たる、帶と云ふ物は、姿勢を作る主眼點となつて、重要なる役目を保つて居ます特に後ろ姿の優醜は、一に其締方の巧拙に繫つて居るのです、單に美學の上から論じても、女服を著た人、其輪廓を一の物體平面として觀れば、帶は上下膨みの中間を締括り、全體の恰好と整頓を作つて居ります、近來女が羽織を著る樣になつて、女服の美を臺無にし日本女裝の有する、廣き想像の天地を狹めたのは遺憾千萬です。

青葉若葉、初夏の候は、總ての女がイキに見へます、夫れは主として帶の働きです、櫛卷か洗髮かで日傘をさし、荒き紺麻摺の單衣に、裏は黑襦子表は羽二重芭蕉か何かの模樣の帶を、無雜作に引かけに結で居る……と云ふ樣なのは見る人に快活なる感じを與へます近來藝者が御大鼓を結びますが、あれは野暮で、紋付の時しか似合ません、矢張藝者は昔の樣に、ダラリ結びの方がよく似合つて、情味が豐富です。

是から愈本文に入ります、或時粹で高尙な一本のよき帶が新調されました。夫れは新妓のひろめに歩行かす爲めに、抱主の姐さんが奮發して作つたのです、『イヽ帶だネー』と、何處の女將も仲居も帶計りほめそやしましたので、其妓は不平でした、つまり帶に負けたのです、尤も男でも此妓の樣に官爵財產などゝ云ふ帶に負けて居る人間が澤山にあります。

偖も其後、件の帶は幾人かの妓に、交る〳〵結ばれた末、某る年の暮、裏通りの練瓦の倉庫の裡に濕紙で四角に包まれ、紙捻りで縛られて居る憐れな自分を見出しました、其所には、顏馴染の御白粉臭き衣裳の數多くが、同じ憂目に置かれて、ナフタリン臭き息をしてましたが、肌曖き衣替の頃になり、一同は一包の衣類と交代しました、其時姐さんが、夏の移りは樂だと云つて居ました。

帶は久振に自宅に歸り、折目の皺をアイロンで直されて、名計り總桐の箪笥に落著きましたが、ドノ抽斗も大抵は空家でした、帶は僅半歲の間の變化に驚きました、抱への妓は半分に減り晝間花を引いたり、御稽古をしたり、ノロ氣の交換でハシヤギ、食べ物の奢りッコを仕たり、呼出をかけたりする樣な、眼かな氣分は少しも無く神棚のあかしもボンヤリとして、疊は汚れ、火鉢の灰の中に豆の皮一つも有りませんでした、一同は御座敷から分捕つて來た煙草を共同でフカして、愚痴を並べて居ました。

夕方に珍らしく電話がかかりました、湯から歸つておめかしの濟んだ計りの名指されの其妓は、急いで支度にかゝり、長襦絆に伊達衆をして、衣裳を引かけました、ユキが少し長いのをウマク著こなし、裳をからげて腰紐を締め、彼の帶を取出して、二つ卷いて右を短かく左を垂らしました、多分此妓は左ギッチョウでしよふ、自分一人で結び直す時のクセと見へます、そこへ姐さんと朋輩の妓が來て、一搖すり二搖すり、後ろから締り加減を聞き〳〵、三人がかりで、ヤット締付ました。

其妓は芝居の狐忠信の樣な恰妓で、少しウツムキ加減に、口に啣へて居た帶揚を後ろに廻して、前で結び端を帶の間に突込ました、赤き絹縮の鹿の子が少し食み出して居るのは、眼によき感じを與へます、是より以前プロペラの破片……斯ふ云ふ風に名筆を揮へば、紙見たよな、セルロイドを前にも後の上では可なりに春宵の悄調が漂のは變な商賣です。

此室內の人々は、飲み呑び彈ひ

# 京城雜筆

ます、是より以前プロペラの破片見たよな、セルロイドを前にも後にも入れましたが、あれは甚感心しません、箱屋か女髪結が扱へばアンナ道具なしにキチンとします而して後、帶止めを少し斜線にしてパチンと締めて、手早く帶の間ひに紙入を挾みました、其中には三味の糸の幾卷と、脂取紙と、御客の名刺二三枚と、唄の文句を覺へ書きした紙の片れと、十錢白銅が三つ、ポチの切符が二三枚程這入つて居りました、……よく財産調査が行屆きました……帶が結び上ると後ろをポンと叩きました。

入浴より此時迄、ザット四時間と五十六分三十秒、女と云ふものは手數のかゝる代ろ物ですが、此れも神聖ならざる社會奉仕的勞働の一種です、線香代は不勞所得ではありません、夫れを高いと云ふ署長さんがあらば、抗議を申込んでもよいかと思ひます、併し男でも文化生活とやら云ふものは、故らに面倒臭く仕組まれてあります熟ら考ふれば人間と云ふ奴は厄介千萬な動物です、下駄の要らない鷄、フツて居られる馬杯を、羨ましずには居られません。

彼妓は少し身をひねり、後ろを見、前を見、横を見て居ます、斯る場合の姿態にも踊の素養が現はれて趣きが有ます、處女か新婚の日、容姿を作る時には、何となく人身御供の感がありますが、反之商賣人のは、勇士が戰場に向ふ時甲冑を著せるよふな勇ましい感じがします。

妹藝者が下駄を揃へまして、彼妓が敷居を半ばドリた時、御大鼓の上でカチリ〳〵と火花が走りました、格子戸が戛らと開くと、御神燈の火が微かに搖らぎました……斯ふ云ふ風に名筆を揮へば、紙の上では可なりに春宵の情調が漲ります。

× × ×

夫れから二時間許り後の事です或料理屋の小坐敷に、擬ひ朱檀の食卓を取圍み、五六人の男女が可成醉つて居ました、多分二次會とやらでしよふ、食卓には數多〳〵の料理が亂雜に並べられ、藝者の分迄一人前として出して有ました、少しロジックに合ひませんが、仲居の氣轉と云ふものには、常に高き價が拂はれます、料理には殆んど手が著いて居ません、定めて明日は郊外の豚の腹を肥す事でしよふ、隨つて此客の紳士は、畜産に貢獻してゐます、料理屋と云ふものは變な商賣です。

此室内の人々は、飲み唄ひ彈ひて盛にハシヤイデ居ましたが、彼帶は矢張一座の重鎮でした、其中一人減り二人減り影を沒して、彼妓獨り牖窓の敷居に腰かけて、櫻色の横顔を夜風に弄らして居りました。

軈て、或室の次の間の薄闇で帶の軋む音がしましたが、其解きかけの帶の端に、自から躓いた拍子に白銅が二三個轉がり落ちました

本篇の主人公たる彼帶は、獨り靜かに、春の夜深けを衣桁に輝いて居ました、任務を伊達卷に委讓して安心したのでしよふ。

帶の主は、多分浴室にでも行つた事と思ひます、夫れにしては隨分と長湯ですが……。

## 詩學古事抄錄

萬盛書閣主人　古城梅溪

### 范蠡及西施

苧蘿山若耶溪の傍らに東施西施の家あり、西施の女美色あり紗を溪に浣ふ、越王之を吳王に獻ず、其後吳を滅ぼし范蠡西施を取りて扁舟に乘じて五湖に遊んで而して返らず（吳越春秋に見ゆ）。

誰憐趁女顏如玉。曾賤江頭自浣紗（王維）朝爲採溪女。暮作吳宮妃（同）越王閟浣紗（宋之問）分明石潭裡。宜照浣紗人（張子客）吳王在時不得出。今日公然來浣紗（王昌齡）何處浣紗人。紅顏未相識（李白）已見浣紗人（元美）惆悵無因見范蠡。參差烟樹五湖東（杜牧）誰解乘舟尋范蠡。五湖烟水獨忘心（吳融）范蠡五湖門（子美）好乘范蠡扁舟興。高掛一帆歸五湖（吳商浩）百頃誰解范蠡舟（元美）霸越歸來計未窮。扁舟遙泛五湖東（李先芳）飄々范蠡舟（章表）西施昔日浣紗渚。石上寄者思殺人（樓穎）西施乳滴露華寒（攀龍）西施漫道浣春紗（萬楚）西施自愛傾城色（干鱗）

# 馬來半島の風物

水原高農講師　市村毅

◎馬來半島で誰しも直ぐ眼につくものは何よりも先づ密林の發達であらう、繁るがまゝに又朽つるが儘にまかせられた大森林は處によると海岸から直ぐ始まつて、何處までも奥深く續いて居る、今でこそシンガポールからピナンへ向け北へ北へと行く途中、殊にスランゴール州からペラ州を横ぎる鐵道の兩側は盛んな錫採掘のためにそちこち矢鱈に掘り返へされ、又は崩されて、大部分荒廢に歸して居るとは言ふものゝ、曾つては物凄い處女密林の神秘境であつたのである、鐵路の東方遙るかに峨々として聳え立つ半島中軸の山脈あたりは勿論のこと、東海岸一帶の地は大方人跡未踏の地域で占められ從つてそれ等の内容に就ては何人も聞いたこともなく、依然疑問の密雲に深く閉ぢ籠められた儘になつて居る、そこは單に猛獸毒蛇活躍の舞臺のみであらうか、それとも天然寶庫の一大埋藏地であらうか、すべてが不明であればある程吾々の好奇心をそゝること夥しく且つ又今後それ等を開發せんと欲する人々によつては興味津々として盡せぬものがあるわけである。

◎筆者も東海岸地方の北部に位するトレンガヌ州の南端、クママン河と其支流の畔に約一ケ月を過ごしたことがあつた、そこはシンガポールを北へ距ること二百哩、時折トレンガヌ通ひの小汽船が河口近くに横付けになること以外は他からの交通もなく、すべてが野蠻ですべてが原始的な域を脱して居ない、絶えず濁り勝なクママン河は水が豐富で獨木舟の往來や河畔の處々に僅かな人家こそ認め得るが、若し一歩河邊から内へと踏み込むならば最早其處は先の見透しも全くつかぬ樣な密林で埋まつて居る、斯うした森の中には道など有らう筈がなく、若しそれを通過しやうとするならば土人共を雇つて、歩き得る樣に、それからそれへと伐り開いて貰はねばならぬ。

◎どんなに晴れた日であつても繁り合ふ葉が日光をも充分に透さぬ此森の中は丁度黄昏の樣な暗さと陰鬱とを感じる、稍にこそ葉ずれの音が聞えても、森の下闇では溫室に居る以上に蒸し暑いことが多い、天氣の好い日にはヂッと耳をすまして居ると何處かで蟬の聲が聞える、按摩の笛の樣な美音で、然も整つた音律、それは斯うした危險に滿ちた場所にも拘らず、思はず聞き惚れて陶然となる、音樂の杜、そして其瞬間は少くとも天國を思はせる。

◎だがそれはホンの瞬間であるに過ぎない、籐か鐵條網の樣に絡つた間を顏顰め乍ら通過する時でも人の身の丈よりも高く延びて居る芋齒の繁みの裡に分け入る時でも或は自然に倒れた大木の上を跨いだり、下を潜つたりする間でも、其處には常に何とも言へぬ不愉快と恐怖が伴ふて來る、猛獸毒蛇又は山蛭の襲來、そうしたものに對する懸念は此場所を惡魔の森化して終ふ、だから自分の歩む先の繁みがガサッと言ふときには無論のこと、虎や象の大きな足跡或は蛇の拔殼を見たときでも思はずギョッとして、稍々もすると尻込みし勝になる、その中でも始終惱まされるのは山蛭である、薄暗く繁つた密林の下、殊にジメ〳〵する場所に潜んで居る彼等は如何して人の居ることを知るのか、兎も角何處からともなく一足二足と忍び寄つて來る、小さな頭を振り立てゝ尺とり蟲の樣に延び縮みする其醜い姿と自分の本能を何處までも滿足させ樣とするその小さな努力、そうした有樣は見るから憎氣がある、彼等は隙間と言ふ隙間が見付かり次第どんな處からでも侵入して來る、そして吸付いたが最後思ふ存分血を吸ひ取らぬ限り引張つても離れ樣としない、そうかと言ふてそれを敢えてすればロ元から千切れて其部分が化膿する樣な目に遭はせられる、森林生活と山蛭の群、それは思ひ出してもゾッとする。

◎南洋には名物の大夕立がある、稍にサッと一陣の風が吹くと共に何時かはあたりが暗くなつて行く森の中ではそちこちで人呼ぶ樣な猿の聲が聞えて何となくすべてが落付かぬ氣配がして來る、遠く聞え出した雷の音が近づくに從つて雨がボッリ〳〵と降り始めるピカッと一閃又一閃、然も轟き亘る雷の音につれてあたりは忽ち阿修羅場に變化して終ふ、稍に龍の樣に降り注ぐ雨の音、大自然の力に打勝可くもない些々たる人間は斯うより外に方法がない、何と言ふ物凄さだらうか、然しそれも暫くの々に明るくなつて再び沈默に返へり、稍に鳴き出す蟬の聲や小鳥の

したことがあつた、そこはシンガポールを北へ距ること二百哩、時

人の身の丈よりも高く延びて居る羊齒の繁みの裡に分け入る時でも

の音につれてあたりは忽ち阿修羅場に變化して終ふ、稍に龍の樣に

降り注ぐ雨の音、大自然の力に打勝可くもない些々たる人間は斯うした場合には只身を堅くして蹲る

より外に方法がない、何と言ふ物凄さだらうか、然しそれも暫くの間で、霽れ上ると森の中は次第々々に明るくなつて再び沈默に返へり、稍に鳴き出す蟬の聲や小鳥の轉を聞て旅人は漸く心を落付ける

◎晝でさえ不氣味な森の中は夜になるといやが上に凄味を帶びて來る、風の無い夜更けの靜けさ、細い月が幽かに葉の隙間から蒼白い光を投げて、更くるに從ひ沈默は更に沈默を增して行く、傍に猛獸避けと惡蟲避けを兼ねて焚く火のみが時々燃え上つては幾分の心強さを與へて呉れる、大自然の威壓と言ふて好いか、何と言ふて好いか、身體中は段々石になるのかと思ふ位に硬くなつて、そうした場合には神經がたかぶるために、眠らうとしても容易に眠り難くなる時に野獸の唸り聲に驚かされることがあるかと思ふと、一方では大木が自然に倒れる大きな響で膽を冷やすことがある、南洋の夜の森それは特殊の世界であり又神秘の巷である。

# 京城雜筆

## 旅先から

### 長門峽から

山縣隈汀

峽谷美を以て名ある阿武川沿岸の奇勝を探らんとて東萊溫泉に滯浴中、ッィ玄海洋を越えました、未だ曾て讀まざるの書を讀み、未だ曾て遊ばざるの名勝に遊ぶのは人生の二大快事であると東坡が言つて居られますが自分も本當に然うだと思ふのです。(三月卅日)

### 東支線から

廣江澤次郎

東支鐵道汽車中、無聊の餘り作りし俗謠(ドン〳〵發展節)。

(一) 狹い日本や朝鮮で赤くなつたり不逞たりし短い人生送るより皆さんお出でよハルピンに

(二) 物が安ふて新らしゆて生活自由な樂天地、功名富貴も腕のまゝ皆さんお出でよ北滿に

(三) 毎日貳千の人口が殖へる日本の將來を何と御覽うど遊ばさる皆さん行かんせ海外へ

### 咸興邑から

加藤松林

とうとう咸興へやつて來ました。元山が不成績であつた證據です。

二三日以前降つた雪が消えもせず、元山より汽車で四時間、野も山も眞白です今も亦ちらちらと舞つてゐます、然し暖かい。

雜然としてはゐるが何となし印象のいゝ邑。

いづれまた(三月廿五日夕、日出旅館にて)

### 東京たより

福田有造

拜啓、もう櫻の花の咲くに間もなきに寒くて此の模持にてはとても四月も十日過ぎにあらざれば六ケ敷からんと存じ候。

まだ退京も出來ずに——朝鮮の方がノンキにてよろしきやに存せられ候。何か書いて見度いと思ひますが出さうにもないに悲觀されます。

先は右まで(三月卅一日)

### ◇落花紛々錄

平田久雄

古河電氣の水谷さん、時候も大變良くなつたので、一つ雜筆寄稿家茶話會はドウですと言はれる▲イヤさう言はれると面目ない、去年から方々で催促されて居ます、今年はどうでも一ッ開催しませう▲久原鑛業の小龍さんは、珍らしい風流の人で、お宅で客などすると屹度席次は抽籤、而かも男客なら古來の美男、女客なら古今の美人を符號に用ひる▲いつかも生田平北が、在原業平を引きあて、花仙の女將が同じく小野小町……そこでイヤ〳〵乍ら『業平殿』『小町殿』と麗々と書かれた席へ著坐、此手でいつもワッと言はせる。

# 京城雜筆

## 自樂草舍より

殖産銀行　中島司

### 花枝欲動春風寒

昨年の日記を繰つて見る。『東園の樹、枝條再榮。櫻も、杏も、躑躅も、名を知らぬ灌水も、一齊に蕾を持ち、楓の新芽が萠した』と四月十三日に書いてある。『昨日まではまだ蕾であつた書齋のうしろの躑躅、今朝は半分ほど開いてゐた』と十四日には記して居る『今朝も雨だ、向ふの岡には若い木の芽が煙るやう、連翹も咲いた』とは十五日の記事の一節だ。

ところが今年は、何といふ春の足どりの遲さであらう、四月は早や十五日といふのに、楓は新芽どころか、まだ去年の枯葉を纏つたまゝだ。躑躅は半開どころか、蕾さへ見られぬ。連翹もその通りだ櫻の蕾は極く幼ない。昨年の四月二十二三日頃には花が咲いたが、此のぶんでは爛漫の季は五月になりはしまいか。

花枝動かむと欲して春風寒し、天下の春はおそい。我が世の春はまだ、まだだ。

### レオの死

レオが行方不明になつた。レオといふのは愛犬の名だ。

昨年櫻もやがて咲かうといふ頃に、生れたばかりのを貰つて育てた。英國種のセッタアであつた。ヨチ々々轉げ歩いたのも暫しで、春過ぎ夏到り、見る見る大きく成長して、溫順な怜悧な良き家犬となつた。

此の春の散策には彼れをつれて花を探らうと、子供等と一しよに樂みにしてゐるが、三月の初めに遊びに出たなり遂に歸つて來なくなつた。犬小屋のみが淋しく庭の片隅に横はつて、時々よその犬がのぞきに來る。あれほど大きくなつて、家を忘れたことのない犬だつたから、滅多にかどわかされる筈はない。大かた朝鮮人に殺されたのであらう。忌々しくて此頃は紙屑買ひの朝鮮人などがみんな犬殺しに見えてならない。

### 日露修交の喜び

我が日本帝國とソビエット社會主義共和國とは、芳澤カラハン北京交渉の順調に運んだ結果、通商條約を結ぶことになつた。これが彼我の間にどれほどの利益を齎らすかは、茲に我が筆の關する所でない。たゞ私自身にとりて日露通商開始の有りがたさを直ちに感じた一事がある。それは西伯利線經由歐亞の交通が兎に角回復した結果、ロンドンタイムスの週刊が二十日内外の日數で私の手もとに屆くといふ事だ。スエズ經由で五十日の餘もかゝつたのが、二十日位で殆ど精確に一週間目に、しかも東京の人よりも早く讀み得られることが、どれだけ私を喜ばせて居るであらう。先日も獨逸大統領エーベルト氏の葬儀の寫眞が大阪朝日に掲載せられたのを見て二三日したら、その光景がちやんと掲げてあるタイムスが來た。此の一事だけでも日露國交の回復は嬉しい

（大正十四、四、十五）

### ◈南山北獄錄

平田久雄

先月十八日――土曜に、鮮銀の若殿原ばかりが、相撲會を開いた▲飯泉さん曰く『見に來給へ、青瓢罩ばかりの相撲ぢやけれど……』併し、その勇氣は大賛成▲殖銀中島さん曰く『この前僕は廣江君の漫畫を書き、天下に澤次郎式を宣布したにも拘らず今度歸城した同君を見ると、僕の指定原型に背き髮をのばすやら、ちゞらすやら、わけるやら、イヤハヤ散々のハイカラ振り、原畫の筆者を蹂躙すること多大である、イヤ向ふがその氣なら僕も覺悟がある、一ッ廣江君の赤化振とでも題して、モウ一遍猛筆を揮ふかな』……實際あのなげやりの廣江氏が、近ころは大邊なおめかしになつたとは、一體どうした風の吹き廻しか▲河内山火災社長、逢つたところ世辭もなくお上手もない、けれど、仲々親切なところがある▲ふた月目か、三月目には、何か知ら書いてくれる、記者からいふと丁度往來でひろい物するやうなものだ▲思ひかけないだけうれしい▲殖銀櫻井さんの畫稿が今屆いた▲實際お世辭なしに、甘いものである▲イヤ之なら先生〳〵で田舍廻り大丈夫。時代に處して内助の功を修めて行くには容易の事ではない、之を切り拔けるこは主婦方の研究研究

# 圖書館から

## ―主婦の方々への希望―

京城府立圖書館長　上杉直三郎

今の世相は、昔の夫れの如くでなく何んでも文化〳〵、開放〳〵と叫び、或は平等が高調されて上下の區別は將に絶たれんとして居るが、幾年經つても區別とか差別とかが無くならずに依然としてある樣な感じがする。差別は他人が作るに非らず、自分自らが作る階級でもあるかの樣に思はれて遺憾とするものだ。開放と云ふ言葉が高唱されてから總ての方面に色々と顯はれ、色々な人達が色々な出來事を見せつける樣になり。文化の叫の裏面には『トンデモナイ』駄法螺を吹いて色々の人達が民衆の指針を迷はせたり、豆腐の樣な頭の持主共の神經を痲痺させたりする傾向にあるので、心ある輩は之を一大恨事なりとして盛んに騷ぎ立て反旗を飜へしてヤレなんとかソレかんとかと隨分八釜しい世態を出現したものです。又一方には戰爭當時に千金を攫得して成金風を吹かした連中は勿論のこと、サなくも財界の不況不振の爲めに七轉八倒の苦策に日も猶足らぬを嘆き。之が一方には經濟的に緊張するの氣分を力説して盛んに書き立て、國民の勤儉貯蓄を勸めるあり、又生活改善を唱導して此の急場を救はんとして或は思想安定の要諦を說述して止む事を知らざる人あり。と云つた風に實に種々雜多な百體千態を表出してゐるのを外に見て、只々喰はんが爲めに人を呪ひ、世を呪ふて路上に憐みを乞ふと云ふ敗殘者も日に月に數を增して行く事を考へれば現代は爭鬪の世でもある。

斯く考察して見れば吾人の一生は爭鬪に始まり爭鬪に終るものだ

現代の世相も歷史と云ふ輪路を辿る以外には又何ものも無いと云ふ事にもなる、吾人は生きて此の輪路の一微點に立脚した上は餘程の深刻味がなければ誤り易い事になる、浮腰で居ては何事も出來得ぬものだと信じてゐる。

然るに浮腰で居る人達は隨分ある、殊更婦人界に其の多きを直觀するものだ。主婦は一家の女王であり又母性としての大任を負ふと共に、一家の礎となるべきである、から浮腰で居られぬ、齊家の秘法は、之を一國に及ぼせば治國の大法ともなるものであるから、主婦方は發奮一番すべきである。一美粧術の研究に滿足したり、洋服裁縫や編物の一通りに鼻を高くしたり、お料理の研究に許り沒頭して居る世の中ではない事に自覺して欲しい、主婦として母性として立ち行くには、良い加減の輕薄では心細い感じがする。此の世智辛い時代に處して內助の功を修めて行くには容易の事ではない、之を切り拔けるには主婦方の科學研究力に俟たねばならぬのだ、扮粧に身を堅めて、今日は某方面明日は彼の方面と出歩いて日も稽足らぬと云ふよりは平常着で圖書館通ひでもやるが得策だと信じてゐるのだ

書籍の高價なのは一般家庭殊に俸給衣食者の爲めには一大恐慌である、此處に初めて圖書館の利用が高調されてゐる、食物の營養價値の研究もよし、家庭經濟の研究もよし、育兒法、家庭衞生、と云つた風の學修もよし、社會問題に關する考究も可なり、或は地理歷史に就ての興味ある讀書も可なり政治經濟の智識修得も亦可ならん又產業方面の調査可ならん、文學語學の學究も可なり。然るに是等の一般的書籍を家庭に藏すると云ふは至難の事である、殊に專門的の科學や藝術書に至つては尙史の事である、此處に初めて圖書館利用の必要が認められて來る。家庭教育が八釜しく云々されても、母親教育とか父親教育が高調されぬ處を見れば、矢張り世の中と云ふものは隨分迂遠な事を兎や角と騷ぎ立てるものぢやと思ふ。假りに自分の子に飛行機が如何にして飛ぶかと發問されたら、之に對して子供の智識慾を滿足させる樣な確答を與へる母親が幾人あるであらうか、此の情ない事例を痛感する時に、吾人は女性に向つて資質の向上を叫はずには居られぬ事になる、ドラぬ西洋カブレに身を窶す閑があつたら、眞劍になつて今少し研究に志して欲しい、そして主婦として健實な向上を期し、一方には良妻賢母としての美德を兼備して欲しいものだ。

# 女は弱いか

總督府鐵道局　阪上滿壽雄

一、前言

私は此斷片を理論のためや虛榮のためや自己滿足のために書かうとするのではない。

二、事實

生れた子供のために娼妓になつた藝者があつたり、不義の子の始末のために娼妓になつた女があつたり一家の貧しい生計のために辻の暗闇で僅か二錢の對價で賣淫する女があつたりする事實がある。

私は藝者といふものゝ生活內容を知らないから子供が出來たら娼妓にならなければならないものか否かについては無知である。又不義の子を生んだ女の家がどんなものであり、又その女の性質がどんなものであるかもハッキリ知らない。それらは新聞紙の報導したる事實であるといふことによつて事實であることだけを認められゝばそれで第一義的問題の考察は成立すると思はれる。

三、考察　上

『女は弱しされど母は强し』といふことは女にとつて力强い確認である。それによつて女は自己の地位を明白に認識し男は女の未必條件に伴つてだけでも女性自身を尊敬する。然し乍ら『女は弱い』といふことが前提であるならば、そして假りに前提でないとしても實質上否定出來ないものであるのならば處女妻、母、寡婦は『弱い』ものだといふ結論に到達する。從つて『母は强しされど女は弱し』といふことも眞だといふ演理的考察が普遍價値の認識を可能ならしむることになる。若し夫れ『强弱』といふことがバランスの問題であつたとしても尙且『されど女は弱い』ものだといふ事が普遍的でないとは斷言出來ないであらう、只女としての女性美が貧民窟の賣淫母や娼母やにより多く發見出來得れば『弱い』ことのための結果自體は少ない非難をしか受けなくて濟むのに過ぎないのである。

四、考察　中

吾人はエデンの果樹園に禁斷の實を食したアダムとイブとの物語りに人心の腐敗を憂ふることの必ずしも當然でないことを考へる。何故なればそれは人間の當然だと考へるからである。私はそれは事實が單純だからだと考へる。單純なるが故に社會的影響がない。即ち害せらるべき利益及公益が存在しないから不正概念が成立しないのである。然しながら現在は組織が複雜であり、心理作用が複雜であるが故に生活關係も複雜となり公の秩序と善良なる風俗によつて規律しなければ團體生活が維持せられない故に同一の行爲が時によつて正ともなり不正ともなるのである。從て二人の男女のみの社會に於ける性的行爲は人間當然のものであると考へられても現在の二人の男女の場合には複雜なる考察が必要である。即ち何れかの一方が配偶者のある場合、双方とも配偶者のある場合、双方とも配偶者のない場合、相手方の人格上の地位、即ち相手の女が處女である場合、性的行爲の慣行者である場合、又はそれを職業としてゐる場合並に經濟狀態等、夫々考察の中に取入れて判斷すべきである。

五、考察　下

以上の考察によつて現在の女が『弱い』ことのために避く能はざる受難があり得ないならばそれは社會のために幸であるが、事實は之に反する。

『女は弱い』ものであることについては二つの見方がある。一は主觀的であつて他は客觀的である。主觀に於て『女は弱い』ものである事を立證するに好適の例がある。即ち娼妓になつてゐる五百餘の女についてその當初の心持を調べた結果によると『死んだ方が良かつたと思ひました』と答へたものは僅か七人でその中には高等女學校を卒業したものもあつて『死んだ方が良かつたものは概ね相當の教育のあるものであつたことは當然である。勿論それのみがその場合の判斷要素ではないしその强さが自己犧牲とかその他の母としての義務を

かつたものは概ね相當の教育のあるものであつたといふことである即ちこの調べについて考へると第一に絶對拒否してゐないといふことを明かにすることが出來る。第二に『思ひました』ことが頗る興味があると思ふのである。

客觀に於てけ女の『弱さ』を保護することについて社會人の一部に決して忠實でない實際のあること、妻が夫と同じ意味の保護を十二分に法律上に於てさえ受けてゐないこと、男女の正しい生存競爭は時に女にとつては不當に不利であること等それは社會的考察の結果その實例を知ることは決して困難ではない

その一例のために最近の一裁判であつた夫の性交不能による離婚原因の有無といふことについて考へて見たい性交自體はアダムとイブとの行爲の實質と同樣であるが、その事實の當然のみから判斷することは不可能である即ち家族制度の維持が重要な國民生活の核心である以上その家族制度の維持といふ方面からも、そして又善良の風俗といふ方面からも判斷されねばならない勿論それのみがその場合の判斷要素ではないことは當然であるが、民法第八百十三條五項『配偶者ヨリ同居ニ堪ヘザル虐待又ハ重大ナル侮辱ヲ受タルトキ』の虐待又は侮辱といふことが刑法に謂ふ有責違法の程度でなければならないが、又自ら欲せざる偶然による結果でも恰も故意であるが如くに同條にいふ『同居ニ堪ヘザル虐待又ハ重大ナル侮辱』に該當するのかといふ事は一應法律上の問題としても考察せられねばならないことであると考へる。勿論このことは法律問題としてのみ解決されねばならないことではないが民法第八百十三條以外明文のない離婚理由といふものが存在しない以上法律問題が發生し且解決すべき役割に於て存するといふべきであらう。たゞこゝに私の考へたいのは性的要求の調節機關が男に對しては開放且自由であることの不平等であることは男子自ら女子のために反省且生活改善の必要があるであらうといふことである。

六、結論

『母は強い』ものであるには相違ない。然しその強さが自己犧牲とかその他の母としての義務を十分にそして適度につくさしむる女性が『女は弱い』ことのためにその『弱さ』とそして同時に強さであることを實行する。その事實の具體的であると同時にその危險は抽象的には家族制度の不安、女子開放の不當な方面にまでの要求となるのである。

男は『女は弱い』ものであるといふことのためにその『弱さ』を十分に保護しそして『母は強い』ものであることを合理的に實現せしめねばならない。私は同情と理解による合理的生活を個人と家庭と社會とに要求したい。

# 書屋日抄

雜筆書屋主人

四月一日　晴

迚も上天氣である。何處かへ出かけやうとする處へ、久保田君來る。今大邱から歸つた處とて、兎肉一括をくれる。お土産かねといふと、イエ、藤井さんからのことづかり物ですと答ふ。さうだらう久保田君とお土産とは古來前例のないことだ午から森さんを見舞ふ大によし。炬燵に寢そべつて、太平記を說く聽くべき節多し。例へば『眞書太平記は上下には下克上、横には回忠の合成なり』といふが如き。

四月三日　曇

折角の祭日、曇りて風寒し。外出する氣なし。鳥越君來つて、障子のやぶれを、つくろつてくれる。阪野君來る。加藤書伯來る。書伯抗議して曰く『私と德野氏と、碁淫的振舞特にあるは、正に事實也。されど、細君がそれを忌み嫌ふといふは捏造也。兩人局を圍めば、細君はにやりと笑ひ、これを機會に、早速店動に行く、否、行くために、碁淫的振舞特に歡迎なり』と人情說き得て委詳。僕曰く『ナール程、違ひない』

# 奉加帳

京城郵便局　山根貞一

【三八】

私の住宅は借入官舍で、其家主は土地の有名な土木受負業者であつて、私が這入る前迄家主自身が住つて居つたと云ふから、多分受負業者と間違へたのではないかと思つて、私の身分や名前を名乘り、彼れと過去に於て一面の識もない樣な氣がする由を告げた、之をすると彼れは勿論彼れの妻も非常に驚いて、近所で目指す受負業者の宅と敎へられて來た上、彼女は文盲である爲め表札を讀み得ず思ひ掛けない失禮をしたことを詫び立ち去らうとした。

私は彼等夫婦に分り良く目的の人の住所を敎へ一枚の紙幣を與へやうとしたが、彼等は私の好意を謝し、同業者でない私から惠まれるのを心苦しいとて厚く禮を述べ敎へられた方面に立去て了つた。

同情ある同業者の惠みに依つて生きて居る彼等、亦不充分かも知れぬが心から此種の人々を保護して居る同業者、此兩者の間には美しい人間美と溫かい人間愛の閃きが窺はれた。

數年前私が島根縣の山奧で、鑛山生活をして居た時、各地の鑛山で落盤やダイナマイトの不意の爆發で負傷し、勞働が出來なくなつた坑夫達が、飯場頭達から奉加帳を貰つて全國の鑛山を渡り歩いて生きて居るのを見たことがあつた。之等の人達が未知の鑛山へ出かけて行つて、奉加帳を示すと飯場頭や坑夫達が之を審査して正當と認めた時には、其人達を客人として扱ひ、來訪者の心の滿つる迄之れを止め置いて優待し、出立の際は旅費を惠むで立たしめるのである然し此種の客人は之を長く逗留しない習慣らしく、或期間が過ぎると次ぎの目的地に向つて出發する。平壤に勤めて居た時の或る長閑な日曜日の午後、日當りの良い南向の庭で、獵犬の手入れをして居つた時、ぜひ私に會ひ度い男女二人の來客があるとて呼び込まれた。

名前を聞いたが、まるで未知の人々である、形を正し急いで玄關へ行つた、二人共一見して物貰ひだなと思ふ樣な哀れな姿で立つて居る、男の方は詰衿の羅紗服を著ては居るが、所々の破れ目から薄穢なく鼠色に汚れたシャツが顯はれて居るし、女の方も二年や三年は洗ひ張りをもした事のない樣な縞目も分らぬ木棉の袷を著て居るしかも男は盲目であつて兩眼は全く塞がつて居た、其年齡は何れも五十過ぎであらう。

私は來意を問ふた。

彼れは徐に禮儀正しく初對面の挨拶をした後、之れを見てくれるやうにと、古びた手垢だらけの和綴の帳面を差出した、其表紙には薄墨で『奉加帳』とある、第一枚目には餘り上手な書體ではないが世話人數名の連名で、彼れの原籍年齡氏名並に救濟を要する事由等を記して、同業者の同情を求めてある。其の次の紙面からは各地の同業者が、三圓五圓多くは袷圓も援助して署名してある。中學時代を京都で送つた私は、之れを讀むで失業の原因の起つた場所が京都の近く山科であるのに一種の懷し味を感じたから尙深く彼れに其原因、來訪の事情等を聞いて見た、夫れに依ると彼れは若い時から建築勞働に從事し、最近は山科附近の鐵道建設工事に屈はれて居たが爆發藥の不時の炸裂に會ひ、不幸兩眼を失したが、世話役達の同情に依り、奉加帳を貰ひ受け、各地同業者の助けを受けながら、夫婦手を携へ流れ流れて平壤迄辿り著き、"先づ第一に親方（私を指して）の御同情に縋りに來たとのことであつた。

私は元來物貰ひにはなるべく與へないことにして居る、之れは大した理由があつてのことではないが、多くの物貰ひは常習的の物貰ひであつて、しかも相當强健な肉體を持ち活動し得らるるに拘らず世の憐みを乞ふて生きるのを職業の樣に心得、働くのを好かない樣であり、亦彼等は互に連絡を取り一度與へると仲間に知せ合ひ、與ふる家のみを襲擊するの方法を取つて居るらしく、其上私の境遇は人を救ける程物質的に惠まれた立場でもないからであつた、然し此場合は如何にも引き付けられたる樣な氣持ちがしたから、奉加帳に記入することなしに少し許り惠もうと思つたが、私を親方と呼び、平壤へ著いて第一番に訪問して來たと云ふ點が甚だ不思議に思はれた。

ものらしい、斯くして山から山へと同業者の仕事場を渡り歩いて一事件で、思はず數年前の記憶を呼び起し、此種の人達が持つて居る度の低い勞働者、特に鑛山勞働者の仲間が養老年金、勞働者保險、

ものらしい、斯くして山から山へと同業者の仕事場を渡り歩いて一生を終る者もあらうし、又奉加帳に依つて得た小金を元にして小商人に安定するものもあるらしい。

私は平壤の或日出會つた此一小事件で、思はず數年前の記憶を呼び起し、此種の人達が持つて居る現代の多くの人々とよほどの異つた氣風をうらやましく思つた。

物質にのみ走る人々が多くなつた今の世の中に、比較的智識の程度の低い勞働者、特に鑛山勞働者の仲間が養老年金、勞働者保險、又は共濟組合等の進んだ社會政策的立法に匹敵する奉加帳の制度を昔から不文の内に秩序良く實行して來て居ることを面白く思ふ。

と次ぎの目的地に向つて出發する。

# 對局雜感

東京將棋七段　溝呂木光治

○

勝たうと思つて指すと、大抵負けてしまふ。

○

勝たうと思ふと、氣かうわづゝて居る。

のぼせて居る。

だから負けてしまふのである。

○

勝つ時は、大抵指さぬ前にわかる。

『今日は、頭が澄み切つて居るな』と思ふ。

こんな時は、二三番くらゐ續けて勝つ。

○

要領は、簡單なものだ。

心が落ちついて居るか否かにある。

のぼせると、詮議（研究）が足らない。だから負ける。

平靜だと、よく手筋を讀む（殊に敵の手筋を讀む）だから勝つ。

○

勝敗は、向ふが深く讀む（研究）か、こつちが深く讀むかにある。

どつちでも、より以上に深く遠く讀んだ方が勝つ。

○

併し、この程度では、マダ上乘だとは思はない。

自分の手――殊に敵の手を、樂むくらゐにありたいと思ふ。

敵の指手を樂む、賞美する、よく〳〵吟味する――自づからそれ以上の妙境が心眼に映じて來ると思ふ。

願くは、この境地に進みたい。

○

我々は、とかくせかゝと客氣に驅られて、向ふの手を要愼しない。よつて頓死などいふ醜態を演出する

○

すぐ眼に浮ぶ手がある。

どうかすると、すぐその手を行つてしまふ。

が、これがよくない。

すぐ眼に浮ぶ手は、膚淺な手である。

上達しやうと思ふものはそんな忘念を驅排し良苦に良苦を積まなければならぬ

古名人だも、一手に七八時間――數日の勞苦を積んで居る。

我々へぼつこが、うかと手を下して良いといふ法はあり得ない。

○

勝敗を絶して、ふかく道（一手々々）を樂みたい。

一手……そのうちに、無限の世界、無量の趣があるのである。

この消息は、宗看などの詰物を見れば、すぐ解る。

それを實戰に應用しなければウソだ。一手……の世界に、悠々として逍遙しなければウソだ。

# 生活改善

朝鮮鑛業會　德野眞士

×

生活改善と云ふ問題が叫ばれ出してから、もう彼れ是れ四五年になる。私も地方では之れを主唱し、例の『むだせぬ會』などを組織した事もあつたが、さて實行となると却々の難問題である。言ふは易く行ふは難しとは、極めて平凡ではあるが至理たるを免れぬ。

×

雜筆書屋の大家さん岩間氏が、長い間八の哲學の躬行者である事は松本さんから屢々聞いた。そして私は一度も此說に反對した事はない、又左程實行困難の問題だと思つた事もない。六の生活、五の生活ならば兎も角、收入の八割で生活する事は、決して難事でないと信じて居る。殊に天理教の所謂上見れば欲しい〳〵のほしだらけ下見て通れほしの氣もなし、を信條とすれば、六の生活五の生活も出來得る筈である。斯樣に何も彼も心得て居乍ら、さて自分の生活がどうなつて居るかを振り返つて見ると、實に馬鹿〳〵しい限りを盡して居る。

×

私が京城に來てから丁度一年になる。此間私はどんな生活をしたらうか、十一か十二か知らぬが、十以上の生活を持續して來た事は明白だ。それに妻を別府にやり、自分が內地に行くといふ樣な突發事故を加算すると、十五にも十六にもなる生活をして居る。最早や十以上の生活は、やりたくも爲す能はざるの現狀に遭著した。私はいやでも飜然として大悟せざる可らざる場合に立ち到つた。

×

私は先づ第一に居屋を考へた。中島司氏の所謂對醫居は、妻と書生と三人暮らしの私には、多は全く無用の室である。過去一年間の經驗によると、拙宅に枉駕せらるゝ程の賓客は、どうかこちらへと取散らしたる溫突に誘じ入らるべき人のみである。之れと反對に、夏は二階ばかりで、下の室は遊んで居る。夏も多も利用出來る室はないか、夏は二階に多は溫突に、机を持ち廻り一册の本を搜すのに二階を上つたり下りたりする不便を除去する方法はないか。私は實に大きなむだをやつて居ることに氣がついた。

×

三月末、書生が他所に行つたのを機會に、私は家賃四十五圓の家から二十六圓の家に引越した。家はすぐ隣りで南山北岳の眺望はないが、室內の居心地は決して惡るくない、食ふ事だとか——飲むと云ひたいのだが——讀む事だとかは、此調子に整理縮少は出來ぬが家は諦め易いもので、一度引越したら一寸瀟澤な心が起つても、そう毎日移る氣になれるものではない。多少負け惜みかも知れぬが、オイと呼べはハイと應ずる、呼鈴の心配もなく、手を拍く手數もいらぬ、いやはや誠に調法な家だと思つて居ればよい。之れでやつと住居のむだが省けた氣持がする。

×

さて住居の問題は片附いたが、第二第三の整理は迚も不可能だ。私の心の中には、極端な簡易生活をやつて見たいと云ふ考へがあるがどうしても實行する事が出來ぬ例へば書物にしろ道具にしろ、持つて居ると云ふ安心だけで、年に一度も使用せぬものが澤山ある、之等は明かに不用品であるが、相變らず轉々と持ち廻つて、押入れの中や、廊下の上などに幾つもの棚をかけて、滅茶苦茶に投り上げてある。妙なもので古い本には若い日の思出があり、四五年も持ち馴染んで居る品には、何處かに愛著の念がこびりついて居て、容易に手放せるものではない。先づ火事にでも見舞はれなければ私の理想的文化生活は營む事が出來ぬ。

×

私は岩間氏の八の哲學を贊成はして居るが實行する事は出來ぬ。成程よい事だからやつて見やうかと思ふ下から、十五か二十の生活を合理的にやる方法はないかと云ふ謀反心がむく〳〵と頭を擡げて來る。私の生活改善問題は、先づ家賃の差額を何處に膨脹させて暮らして行くといふ事が結局の落だらう。

啄木にこんな歌がある。

働けど働けどなほわが生活樂にならざりぢつと手を見る

私のはこうだ。

今年から〳〵とて幾年をわれや過せし今の儘にて

斯の如き狀態を考へますと、齒の衞生も亦難い哉であります。昔齒磨粉もなく齒ぶらしもない時代

# 自然の叛逆者

利根川齒科醫院　利根川清治郎

現在の私共の舌の感覺は私共の生活に必要以上の贅澤な味を要求し勝ちであります。奢侈稅をかけるならば先つ第一に舌の味覺神經が其選に入るべきでせう。併し此舌の贅澤になつたと言ふ事が、人間をどんなに不利に導いたでせう殊に齒はどれほど迷惑を蒙つたか知れません。

身體が成長したり、體溫を保つたり、運動したりする爲には蛋白質、脂肪、含水炭素、無機鹽類、水などが必要である事は申す迄もないが、此等のものだけでは營養上如何に良質の種類を選んでも、完全に發育成長する事が出來ないのであります、是等の要素以外に必要な物質即『ヴイタミン』（活力素）と言ふものがなければならないと言ふ事が今日判りました。

『ヴイタミン』は現在ではこういふものだと眼で見る事は出來ません、未だ結晶として取り出す事の出來ない化學的物質なのです。此『ヴイタミン』にはABCの三種類（近頃Dを發見したと言ふ人もありますが）ありまして、夫々の役目があります、それで私共專門とする齒とも密接な關係のある事が明かになりました、すべて『ヴイタミン』は熟すると逃げてしまふ事を忘れてはなりません。

『ヴイタミンA』は肝油、バタ卵黃、肉類の臟器などに含まれて居て發育成長に必要です、是が缺乏すると眼病（結膜乾燥症、夜盲症）を起し、或は佝僂病や骨軟化症を起すと言はれて居ます。今『ヴイタミンA』を欠乏する食物を以て動物を養ふ時には、顴骨や齒は十分に石灰が沁み込まないような狀態となり、齒の重さも大さに較べて輕くなります。そして齲齒に罹り易い狀態になります、即ち『カルシウム』の新陳代謝と重大な關係があるのであります。

『ヴイタミンB』は『脚氣ヴイタミン』などゝ言はれて、之が欠乏する時は一種の神經炎を起し、脚氣の樣な症狀を呈します、穀類豆類、例へば大豆や小豆などに含まれて居ます、米を精製すると此『ヴイタミン』がなくなつて了ひますから白米よりは玄米がよいとされて居るのです、此れは齒とは余り關係はありません。

『ヴイタミンC』新鮮な野菜、果物類、例へばキヤベツ、トマト、チシヤ、レモン、サラダ、オレンヂなどに澤山含まれて居る、是れが欠乏すると壞血病と言ふ病氣を起すと言ひます。

齒とは密接な關係があつてこれの欠乏した食物を動物に與へると齒齦は發赤腫脹して出血し易くなり齒がぶら〳〵動き出し、遂には膿汁が出ると言ふ樣な事になります。

斯の如き狀態を考へますと、齒の衞生も亦難い哉であります。昔齒磨粉もなく齒ぶらしもない時代に齲齒はなかつた、其れは彼等が全く自然に順應した生活をして居たからでありました。カルシウムやヴイタミンは全く自然に惠まれて居ました。近代の文化生活なるものは是等に時間と費用をかけて調理を加へ、むざ〳〵尊い要素を失つて平氣で居るではありませんか。自然の反逆者よ。人間よ。自然の悠久なるままに從へ、小策を弄するな……と私は申したい。

## ◈山形村の記

吉田莊一

不二興業全北農場では、最近內地各府縣から、盛に移民を移住させ新福岡村、新愛媛村などを作りつゝあるが▲山形縣の移民には、會社の方にでもあッと吃驚したといふ話▲といふのは、移民の總てが新婚者、しかも出發の前夜祝言をしたばかりのホヤ〳〵連……▲譯を聞いて見ると　男子は總て同縣『自地講習所』の學生であり、しかも移住するには獨身ではいかんとあるので、所長や先生が百方奔走し、渡鮮に先だつて、一夜づくり乍ら目出度杯をしたといふそれこそ喜劇式一團體▲尤も男子がさうなら婦人も滿更でなく、大底高女位の卒業生、それで會社も大喜び『これだ〳〵』と悅に入つて居る▲因に同縣では、夙に自地講習所を設立し、新しき農民教育を施して居るが▲會社の擧には大賛成實地もたび〳〵踏査し『斯くてこそ講習所を作つた素志も報ゐられる』と、非常な乘氣で、一層多數の收容を希望して居る。

# 京城雜筆

## 京城徒然草

殖産銀行　守屋三葉

觸覺の滿足にて足る所詮生活の底級より來る好奇心のみ、興味は唯第三者としての心理學者に存す。

○

近頃滅切り殖へたるは転落ち也道ならぬ戀路に迷ふもの遂げ得ぬ戀に惱めるもの、大方朝鮮を目指して落ち來るも妙なり、春秋の筆法を籍らば朝鮮宣傳の効果先づ転落に表はるとや言はん。

愛に熱するものはあらゆる傳統を嫌忌す、朝鮮は所謂新開地なり、泊手もこゝ迄は易々とも來らず、いぶせき朝鮮宿にひそめば、竹の柱に、萱の屋根位の風流はあるべく、たとひ京城の眞中に居ればとて浮世はなれて奥山住居の氣韻はあるべし、五日三日逗留して所謂二分も殘らぬころほひ氣の早いものは漢江人道橋にて、稍のんびりした者は玄海灘にて此の世を急くに朝鮮も罪深き境地と化したる哉

春を尋ねて春に會はず、卯月の三日と云ふに東都にては雪さへ目立たず、四日難波津には雪さへ降りぬ、十日祇園の夜櫻を見るまだ咲きやらぬ枝も交るに早や『かゞり火』など赤々とたきつゝ行交ふ人の顔のみ輝けり二日待たばやと思へど待ち得ぬ身のいかに悲しき

○

十二日釜山に入る雲かとばかり峯にちまたに咲き匂ふ櫻今盛り也

内地の花に振られ男の
とぼとぼ歸る玄關口
しつかり忘れた世話女房
コッテリ塗つて指ついて
お歸んなせいはコリやどうだ
チエッ！、マンザラ憎うも御座らぬワイ

○

世にいたづらさるゝ程腹立たしきはなし、朝まだきけたゝましき鈴の鳴るまゝに女中などかしこまりつゝ玄關押しひらくに客の影だになし、遙に鮮童の見返りもせず落ち行く御姿を拜するぞかしこき度重なるままに此方も頃ほひを測りつ、物蔭にひそみて其のなす樣を伺ふに怯ぢたる色とてもなく、一押し二押しボタンを押しつ、悠々として立去りぬる振舞大膽不敵のくせものとや言はん、餘りにはげしきに、わざ〳〵工夫を雇ひつ子供のとゞかぬあたりに鈴をつくるに此の度は首馬になりて押しぬ萬策つきたる今日此頃は數を定めて符號となせども、初めての客には通用すべくもあらず、三度のヨモヤにひかされて、漸く御興を上ぐるといふ始末に、さぞや不性者と思召さんも是非なし。さはれ女中や奥樣などの鹿爪らしき顔して扉を開くるに外には立てる人とてもなきなど確に、落語的興味はあるべし、しかしこの興味は鮮童の解する範圍にあらず、彼等の喜びは唯珍らしきにあり、彼は單なる

## ◈原稿内所話

平田久雄

雜筆の寄稿家で、とてもむつかしい字を書いて、文選小僧を泣かせる人が三人ある▲工場これを三傑といふ▲筆頭が久原の小龍さん、これは上手過ぎていけない▲時々鑛業會の德野さんに下讀して貰ふ▲次が殖銀の守屋さん、大底明快に書いてあるが、時とすると、とても解らない▲京日の編輯を相談して廻る▲最後に困るのが滿鐵阪上さん、これは實際わが黨の士だ……天下のヘタ糞だ、ヘタ糞の上に、不明瞭だ▲『へゝ、來ましたね』と、工場子が變な顔をする▲處で、文選氏が大喜びなのは、萩原さん、平井（勤信）さん、橋川さん、中島さん、德野さん、こゝらは一頁位餘計原稿を出しても『マ、ようがせう』……文字の德とでもいふ奴か▲中村健太郎氏がうまい▲阮堂そつくりの字を書く▲大きい字で、强くグイ〳〵やつてあるのが藤井（不二）さんの稿▲右肩上りの一癖も二癖もあるのが飯泉さんの稿▲いかにも暢達雄勁なのが水谷（古河）さんの稿▲うまくなくちやならぬのに、我々に毛の生へた位が今村先生の字▲伊藤判事も、字はヘタだな▲ヘタといへば、その亘頭は篠田博士かも知れんぞ▲ちやんと淨書させてあるのが知事さん、それに蒲原局長ダイブライターは寺尾さん、一度寺尾さんの眞蹟を見たいと思つて居る。

子供のとゞかぬあたりに釘をつく　原さん、平井（勸信）さん、橋川　居る。

# 京城雜筆

## ことば

京城府人事相談所　眞木　猛

僕が日常接近する朝鮮人の大多數は、所謂內地人を指してイルボン、サラムと云ふ稱呼を用ゐて平然として居る。其の之をサイチサラムを呼ぶものは九牛の一毛程の人數に過ぎない。そして此の言葉は所謂同化の妨げを爲すものとして官界の用語には禁物とされて居るが、吾々をして云はしむれば如斯末節の言葉など餘まり氣にしないでもよいと思ふ。

兩民族が一つになるには相當に多數の日子を要する、大和民族と出雲民族の如きも其れである。日本書記に見えて居る兩族の接觸記錄は諸册の二尊から初まつて大方崇神、垂仁の朝に迄及んで居る、其の年數は千年を超へて居ると見るが相當である。

其れを餘まりに拘泥して相手方に向つてイルボンを言葉咎めしてナイチに直さしめたとする、其の一事を以て相互の感じは破壞される、其の破壞を行きつゝあるのが所謂有識階級の行き方である。其の影響と云ふでもあるまいが、近來普通學校の鮮語使用强制と云ふ感じが現然と隨所に現はれて一部の『反國語』の聲となりつゝある先頃の大邱に於ての公職者大會にも普校三年生以下の兒童教授は宜しく朝鮮語に限るべし、そして內地人教員の數を減ずべしとの決議案が提出された、其れで初めて一寸人目を惹いて居る樣だが、焉んぞ知らん此の『反國語』の聲は以前から伏在して居たので、道評議會の新聞記事などには每々見えたことなのである。曾て琉球人に對する學校に於ての國語の强制が『反國語』の聲を生んで、そして其れが轟て反國語運動となつて學校以外に於ては全然國語を使用しないと云ふことになつて當局を狼狽せしめたことがある。

所詮は兩族の接觸の長いと云ふことに同化の成就の鍵はあるのである、アノ武藏野の原の高麗村の前を流るゝものは入間川である、狂言の入間川は當時高麗の歸化人と日本人との言葉の不通を唄つたものでなければならぬ。入間の逆言葉と云ふことは其れでなくては解釋は出來ない、其れが何時の間にやら其の出身を僅に語り暮らすのみの同化民族となつて高麗神社の奉仕と迄來て居るのである。

所謂同化と云ふものは、道德的倫理的にのみ多くの識者が思ふ如くは現るゝものでなくて、却つて案外な方面に可なり根强く浸潤すると云ふことである、大正七八年の頃と記憶する、全州の某富豪の息子が、馴染を重ねた妓生と心中を企てた、極めて新式の遣り方で相擁して全州神社の拜殿で匕首を以て刺して以て自殺した、此の事あつて一年程の間に京城では男女の學生が三淸洞の山中で心中……未遂であつたがを——遣つた、全くの日本式のもので朝鮮開闢以來の出來事である、人も知る如く朝鮮には『追心中』と云ふものはある、男の死を追ふて女が悲痛に死ぬのである、我近松の抱擁心中と云ふものは日本人接觸の感化でなくて何んであらう。

又大正八年の騷擾に現はれた、一つの型は其の行列の先頭に女を置いて居る事だ、前年の日本の米騷動の行き方から拔けて來たのであることも否定出來ない、是れと反對に曾て東京四谷に十人斬りがあつた、其の當人は車掌であつて只のタオルの貸借りのことから此の暴行を遣つた、勿論其の當人は朝鮮人であつたが、爾來引續いて二三年も暴行鮮人が現はれて居つて一時鮮人雇傭を恐れしめた事實もある。

數へたならば斯樣なことは幾干もあらうが、斯うして同化が成立するものと僕は思ふて居る、其の最も直接な生活方面を見ると餘程滑かに同化は成立ちつゝある、『御茶』が先づ這入つた、『オヂヤ』と濁つて今は日鮮共通語となつて居る、『ランポウ』と云ふのも其れである、日本譯の複譯である

此の方面は數へるなら面倒臭いほど澤山である、昔の人々は或は物識りの方々と云ふものは同化の道程に先づ『道德的』と云ふことの柵を設けて馬の鞭を連りに加へて居るやに思はれてならない、一切の道德的、倫理的觀念から超越して無遠慮に流れ込む同化を攫む處に眞なる、そして速なる同化があるではないか、日本人である僕は他の日本人と共に、此心持で進みたいと思ふのである。

# 旭町の夜

朝鮮ホテル　伊藤龍

既に、夜更けて、路上には、軒毎に掲げられた電燈が呆然と輝いて、洩るゝ光線の反射が薄らげに投げられて居た。

人通りもなく淋しかつた。かれこれ午前二時頃になつて居た。時折、長時間の座敷務めの辛さから漸く解放された安心に裏書された全身を車上に乘せて、歸途を急ぐ藝妓や、同じ樣に、厚化粧で塗つた白い顏に疲れ味を浮べ、半ばベールで包み、俯向きながら靜に歩んで歸路に就く妓共や、又料亭歸りの醉どれの男や、主なき空車を挽く車夫などの外、摺れ違ふ人とてはなかつた位に、さしたる事もない旭町通りも、やがて、彼等の姿が消え失せて了ふと、元通り寂そりとして、眞夜中の睡に自然が入り込んで了まつた樣な靜けさとなるのであつた。

南山の半腹の傾斜地で、白水料亭の庭傳ひに建てられた此頃流行の文化住宅造りの家に住んで居る友人と世間話に打ち興じながら、ウキスキーの御馳走に預つて居たので時の過ぐるのも知らなかつた大分、醉つて來たので暇を告げてぶらり〳〵旭町通りを降りて來た

晝の間は春の暖みに、散歩の氣分を唆る今日此頃なのに、眞夜中頃になると、冷めたい空氣が漂つて來て、なんとなく寒さを感ずるのであつた。ウキスキーが、體中に廻はつて居るのにも拘らず、一歩毎に、醉が醒めてゆく樣な氣持が起つて來た。と同時に、身顫ひをせずには居られなかつた。

『四月なのに、未だ斯んなに寒いのか知らん』

獨り思はず知らず、つぶやいて了つた。

千代本料亭の表戸も固く閉されて、時打つ鐘に耳も藉さない嫖客の二人連は、潛り戸を開けて往來に出て來た。

見送つて來た仲居は、木戸を引き寄せながら、輕い愛想を云つた

『では……さよなら、お氣を附けてお歸りなさい。またお近い中に、どうぞ』

閉め樣とすると、

『姉さん、閉めるの待ちなさい私、送つてあげるの……』

粹な銀杏返しに結んだ髮に、色白の面長な顏立ちで、年の頃二十前後の藝妓が、走りながら叫びつゝ潛り戸から飛び出した。

『いづれ、又來るよ、お休み』

冷風の流に、オーバーの襟を立てながら男は答へて立ち去らうとした。

『一寸、お待ちなさい。わたいも歸り路だによつてそこまで送つてあげるのよ』

男は一寸振り向き返つて立ち止まつた。

『おゝ寒い』

と云ひながら男の側へ女は摺り寄つた。

『ちよいと、隨分、醉つて了まつたわ、貴方達が餘り飲ませるんですもの』

斯う一寸、言葉の絲を切つて、彼女より七、八歩前に默り込みながら歩いて行く連れの男に眼を遣つて、

『サーさん、そんなに早く歩くものジアなくてよ、旅は道連れ世は情つて御存じないの……』

『なーにね、お染、久松、籠の中つて云ふから、俺が居たら邪魔になるだらうと思つて遠慮した譯さ』

『そんな嫌味云ふものジャなくてよ』

急ぐでもなく、笑つたり、話したり立止つたり歩んだり、煙草を吹かしたり、樣々な仕草をしながら、足を運ばせて行く呑氣さが、自分には、何と羨ましく思はれたであらう。

やがて喜代中から五六間隣りの車帳場の前に來ると彼女は佇んだ

『それでは、御二方、失禮しますわ、明後日の夜、間違なく來て頂戴、さよなら』

彼女を乘せた車は、かなりの速さで、走つて行つた。

後に殘された客の二人連れは、

『さよなら』

と云つた儘、何事も相互、言葉を交はさずに深夜の沈默と並行しつゝ、前程の樣な悠々な歩み方ではなく急ぎ出した。

自分は歸ると直ぐ、蒲團の中に潛ぐり込んで、翌日の働きに支障のない體を作るべく寢て了まふ事にした（一九二五、四、七）。

民が、子供を學校へ〳〵といふ。
一體、どういふ意味だ。

# 雜想

永樂町人

○

吾々の祖先は、花卉を養ふことは、可なり巧みだつたらしい。

その證據には、菊、櫻、朝顔などの變種を、何百年もの前につくつて居る。

それほど、熱心だつたにも拘らず、彼等は肝腎な一事を、脫却して居た。

それは進化の事實、遺傳の現象である。

あれほど、タシカナ技巧を有ちながら、どうしてこの簡單な事實に觸れなかつたか。

○

私は、頭の問題であると思ふ。

○

今も尙、頭を使ふことは、日本人の一大弱點だ。

○

單に弱點ばかりでない。彼等は學術を蔑視するといふ惡い風儀がある。

學者のいふことなど、うつかり用ひられない。

これだ。

そして、自らよほど傑いと思つて居る。

○

彼等のなかには、日露戰爭の、下瀨火藥のお蔭で勝たれたことを知るものは、餘り居らぬ。

○

そして、斯うまで學問輕視の國民が、子供を學校へ〳〵といふ。

一體、どういふ意味だ。

○

新聞切拔帖の一隅に、その當時讀んだ短歌を、そつと貼つて置いた。

このごろ、その一つを取り出して見ると、

富士の山はるかに見ゆる國原のつゞく稻田の夕あかりする

あるときは思ひかけなき富士の山まともに見へて野の靜かなる

浮世繪の境地だナと、ツイ湯村さんの風手を思ひ出した。

○

大阪の銀行家さうなが、川田順といふ人の歌は、いつも面白い。

ほの〳〵と光り流る、篝ゆへ船にゐる子の夏帶は見ゆ

漕ぎ下る囃喉場の船の鉦大鼓耳をつんざく晉のよろしも

美しくゐむれて川を見るものか向ふの二階に扇のひらめき

しかと大阪といふものを、つかんで居ると思ふ。

# 京城雜筆

○

一日、ぶら〳〵して過して了ふことがある。

併し、そんな時には、何かしら考へ、何かしら思案し、何かしら思惟をまとめて居る。

○

それ故、私にとつては、ぶらぶらの一日は、決して遊惰の一日ではないのだ。

○

餘り走り廻つた一日は、物も考へることが出來ず、原稿も書く氣にならず、ついその儘寢込んでしまふ。

世の活動家といふのは、さうした種類の人ではあるまいか。

落ちついて、考へる時ありやと聽きたい。

○

それは、事業上のことではない人間の內面の世界のことである。

○

雜誌をやつてると、時日の流れの、特に早いことを感じさせられる。

一つを出して了ふと　すぐその次である。それが出ると、亦その次である。

斯うして、一つごとに、一箇月といふ時が流れて了ふ。

『この末どうなるのだ』『否、これ自體が何の意味だ』何も彼も判らなくなつて了ふことがある。

## ◈瀟洒な詩集

平田久雄

和田天民博士から『行餘詩草』を贈られた▲瀟洒たる製本だ▲和田三造氏の題畫など、頗る面白い▲一首を茲に割愛させて貰ふ『經卷藥爐旬日過、却同丈室病維摩、驀然一覺人間夢、半夜窓前月色多』▲行くとして可ならざるなき博士の才藻、眞に欽す可しである▲朝鮮商工會社支配人武田守一氏（在平壤）が、近く『朝鮮經濟史』を公刊する▲著者在鮮多年、苦心に苦心を重ねたもので、一たび市に出たら學界を驚倒すること受合だといはれて居る。

# 京城雜筆

## 木瓜の花

西崎千枝子

○
吾が家の小庭のぼけもいつしらず春立つほどに芽ぐみそめけり

○
木瓜一輪咲きぬと告ぐるわがさまを一大事めくと笑ふ君かな

○
春雨にぬれてさ青き松蔭にくれなゐの木瓜咲き出でにけり

○
はしけやし濃紅ふゝみてさ青なる雄松のひまに咲ける木瓜はも

○
木瓜の花きのふの雨にいちじろく許々多雷の開きたるかも

## 編輯後記

吉田莊一

◎今日は四月十六日――全く好い陽氣です。十日の後には、全市の櫻が一度に咲くでせう。やつぱり春は憎めない。

◎愛讀者の御同情で、良い寄稿が益々ふえて行きます。決していゝ加減なお世辭などいはない東京の細井肇氏なども、口を極めて推賞してくれ、今後進んで執筆すると言明されました。

◎某先輩から大きい會社や銀行の内部の運動通信、趣味通信をやつて貰つたらとの注意がありましたなるほど、そりや面白いと思ひます。輕いすつぱ抜きなど、特に興が深いでせう。この稿に限つて、匿名にしませう。どうか特志家は奮つて御執筆下さい。

◎それから各員の餘白へ入れるコシップですが、何分社が小人數のため、聞見の範圍の狹いので困つて居ます。どうかこの方も匿名でよろしいから至つて罪のない處を御報導下さい。

◎先日、本誌愛讀者山本元光氏から『能率研究』と題する小冊子四十部の寄贈がありました。よつてそれを重なる後援者四十家に分贈しました。武者氏、澤村氏、富田徹三氏などから丁重な謝狀を頂きました。これは山本さんへ御報告……深謝の意を表します。

◎本號の原稿を締切つてしまつたあと、四五の方から原稿が到著致しました、總て六月號へ掲載いたしまず、どうか惡しからず……。

### 次號原稿

六月號原稿は、五月十日締切りますけれど、相成るべくは同五日迄に御惠投下さいますやう寄稿家皆樣に御懇願致します

雜筆同人

## 社告

私共の社では、目下左の兩名が編輯、營業兩方面に立働いて居ますから、どうか御承知置き願ひます。

編輯　石川利夫
營業　八谷賢次

御用事は總て兩名へ御申聞け願ひます。

京城雜筆社


細工の御用は本町
德力へ
電本三九三九

金銀白金
地金ノ御用ハ
京城明治町
德力本店出張所
電本二〇八八
一五七二

京城 德



大正十四年四月三十日印刷
大正十四年五月一日發行
一部定價金四十五錢
京城府和泉町一六四
發行兼編輯人　松本武正
印刷人　前原登久雄
印刷所　京城日報社
京城府和泉町一六四
發行所　京城雜筆社
電話光化門三〇六番



永樂町人著
人生雜記
（定價金參圓也）　發賣所　京城雜筆社

# 官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化生活に缺ぐべからざるものであります

德用大瓶小型振出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

京城府南大門通二丁目九七九八

發賣元 **富田商會**

長電話本局三三〇九番
振替京城四五六八番



春向背廣服
同オーバ
レインコート
新地質續々着荷

**仕立念入り價格は安い**

經濟的理想の既製品頗る豐富

▲御注文に應じ特製仕候

京城鍾路一ノ一九

# 角田洋服店

電話光化門九五五番
振替京城一八四三番



書って御報筆下さい。
◎それから各員の餘白へ入れるコ

京坂新筆祖

電話光化門三〇六番

金剛山産松の實應用菓子

金剛飴
金剛山
金剛饅頭
金剛煎餅
金剛羊羹
金剛おこし
金剛しるこ
金剛柏子菓（朝鮮松の實菓子式）
金剛ぼんぼん

金剛うに
金剛このわた
金剛でんぶ
金剛ほし

京城二本町二丁目
亀屋商店
電話本局 二七番 四五七番

# 向上靴

紳士向
學生向
女學生向
各種

向上靴は彼の有名な教化事業向上會館産業部の製品で御座います、事業の性質から『正しき製作』と『正しき材料』とに依つて作られ、之に『正しき價格』を付して賣られて居ります、何卒御試用の上御批判を給はり度存じます

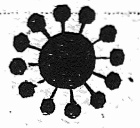
京城南大門通り

向上靴
一手販賣店
## 丁子屋洋服店

電話本局
長二四六
二二九
三〇九〇
番

休日なし毎日夜九時迄營業——御用の節は店内クツ部御呼出被下度候

事務所　京城黄金町通
朝鮮銀行前



昇川商会

工場　黄金町四、交叉点
電話二四七六番



粗製濫造品の輸入漸く劇しからんとする今日最も注意を要するは機械の選擇で御座います
粗惡な機械は時計の用を爲さしめず寧ろ時計無きに優る事があります
此の點に村木は細密に注意を拂つて居ります

瑞西製ニツケル表形アンクル寶石入（金八圓十圓五拾錢）
同ニツケル十六形薄手高級（金拾六圓五拾錢）
十五寶石入アンクル（金壹百圓）まで
瑞西製10型ニツケル腕時計（金九圓九拾錢）
十五寶石入（金拾圓也）
同同（金拾參圓）
十寶石入（金拾圓也）
同同同（金拾九圓五拾錢）
9型十五寶石入

時計を求めらるるには商店の撰擇が第一
最新型の美品多數輸着

瑞西製ガリー會社製ニツケル十五寶石入（實物大）
金四拾五圓也

京城本町二丁目　村木時計店
電話本局四七一・三一一
振替京城一三二九六〇

眞に吾が蓄音器界に新紀元を劃する優秀器

# 蓄音器月賦販賣開始

金三十五圓御拂込と同時に現品差上ます

第二回ヨリ金六圓宛向五ヶ月

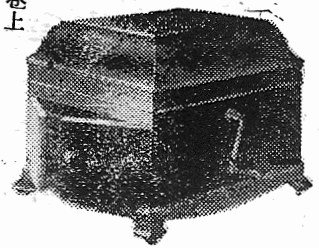
一、高音にして又如何に低聲微妙な音色でも原音そのまに聞かれます

一、瑞西製一吋二挺モータ入

一、演奏力兩面盤五面

一、發音管最新グーズネック卷上

一、品質永久絶對保證



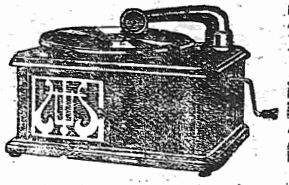
オートホン號

乙號金十八圓

御拂込と同時に現品差上ます

第二回ヨリ金四圓宛向四ヶ月

◎音聲強大、使用に便利で輕るくて嵩ばらず室内用旅行用最適品



京城本町壹丁目

外國貿易直輸入元 セヤマ樂器店

電話本局一四七九番振替京城一〇七五六番

# ▲均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

□均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して居ります故に消化が良しく風味の佳良と獸臭のない事は一度召上つた方には直覺せられます永らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位でありますから値段の競爭をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用
陸軍衞戍病院御用
京城市内各病院御用

## 平山牧場

京城東小門外
電話光化門一三三番

サクラ正宗
春風にサクラ正宗の輕き醉

世界で一番良い
テニスボールを
作りたいと存ます
御指導をお願致ます

角一テニスボール

京城黃金町三丁目

# 朝鮮教育普成株式會社

社長 高橋章之助

電話本局一九四八番

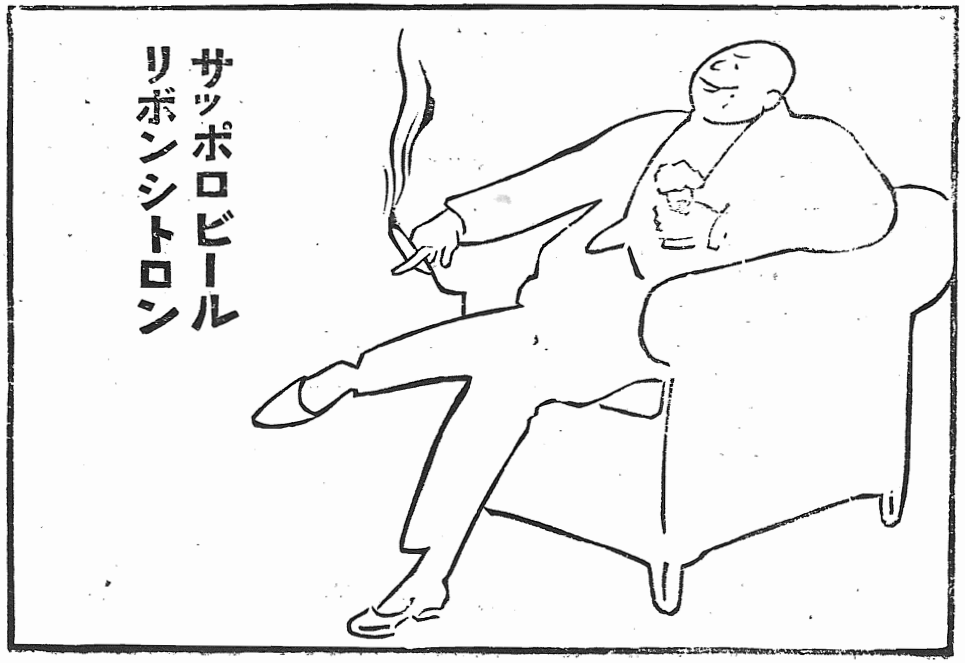
◎銘仙と
毛糸◎

京城本町
ちゝぬや

堀内滿輔

電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番番

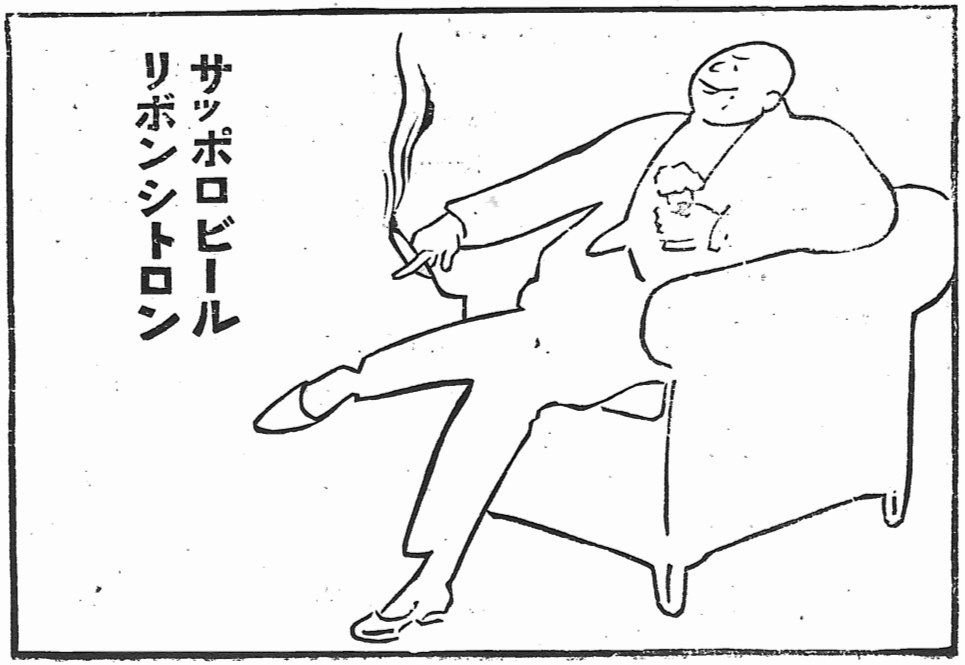
◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます


サッポロビール
リボンシトロン

◎銘仙と
毛糸◎

京城本町
ちゝぶ屋
堀内滿輔
電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます


サッポロビール
リボンシトロン

**單帶荷揃**

すつきりとした嫌味のない單純な柄はるかに清らかな女らしい美を持つ新柄が多數御座います

**單羽織地**

清楚を生命とする單羽織地殿方用として平御召綾糸御婦人用として胡濱小紋西陳御召など柄行新新な新製品が豐富に御座います

**三中井の別染中形**

輕い涼しい味を出した中形の藝術化……三中井には大正十四年式の新柄浴衣地が續々入荷して居ります續々御用命願上ます

京城本町

株式會社 三中井呉服店



京城雜筆（第七十五號）

大正十四年五月二十九日第三種郵便物認可
大正十三年一月二十一日發行（毎月一回一日發行）